公開サロン
大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校
ー東京高師と東京高師附属中ー

NPO 法人サロン 2002 では、月例サロンや公開シンポジウムで何度か「歴史ネタ」を取り上げています。「日本サッカーのルーツ校」については 2016 年度に東京高等師範学校（東京高師）蹴球部について、2023 年度には同附属中学蹴球部について取り上げました。

明治期以降のサッカーの普及は、東京高師の卒業生が全国各地の学校に赴任したことが始まりです。

お膝元の附属中学生はおのずとサッカーの先駆者となり、卒業後の進学先・就職先でサッカー部をつくり、組織の担い手となっていきました。1921 年の大日本蹴球協会（JFA）創設、1929 年の JFA 役員改選（師範学校系から学生リーグ系へ）、1931 年の協会旗制定（キーパーソンは内野台嶺と日名子実三）、ベルリンの奇跡につながるレベルアップ（チョーディンから学ぶ）のいずれにおいても二つのルーツ校が深く関与していることがわかります。

大戦前の日本サッカーのすがたについて、わかっていることとまだわかっていなことを改めておさらいしておきたいというのが今回のねらいです。大きな流れを共有し、今後につなげていきたいと考えます。

2024年5月 公開サロン報告（月例サロン通算331回）

大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校
－東京高師と東京高師附属中－

中塚　義実　NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭

【日　時】 2024（令和 6）年 5 月 9 日（木）　19：00 ～ 21：00
終了後は茗荷谷駅前「はなの舞」（～ 23：00）

【会　場】 筑波大学附属高校会議室での対面＆オンライン（Zoom）

【テーマ】 大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校－東京高師と東京高師附属中

【参考資料】
- NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2016
  「日本サッカーのルーツを語ろう！ －東京高等師範学校の足跡を中心に」
  https://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2016_sympo.pdf
- NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2023
  「日本サッカーのルーツを語ろう！Part2 －東京高等師範学校附属中学蹴球部の 100 周年を機に」
  https://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2023_sympo-2.pdf

＜公開シンポジウム 2024-5 参加者（敬称略）＞

◎は NPO 会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外（5/9 時点）

■ 会場参加者

〈サロン 2002 ファミリー〉

○大河原誠二：筑波大学附属高校蹴球部 OB・OG 会）
○小針昇平（筑波大学附属中学校保健体育科）
◎中塚 義実（筑波大学附属高校／ NPO サロン 2002 理事長）

〈一般参加〉

奥崎覚（フットボール Web マガジン『Qoly』）
小池正通（一般社団法人エスペランサ）
小堀俊一（日本サッカー史研究会）

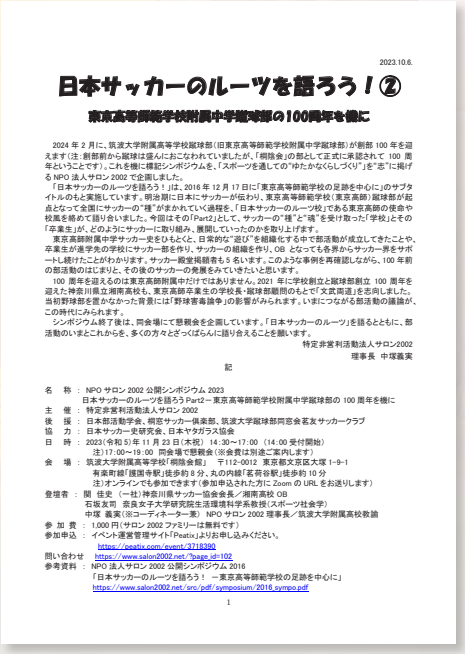
■ オンライン参加者

〈サロン 2002 ファミリー〉

◎小池靖（NPO サロン 2002 監事）
○張寿山

〈サロン 2002 ファミリー外〉

佐藤真成（日本サッカー史研究会）、
平沢勝美（小石川中等教育学校サッカー部 OB）



2023.10.6.

日本サッカーのルーツを語ろう！②

東京高等師範学校附属中学蹴球部の100周年を機に

2024 年 2 月に、筑波大学附属高等学校蹴球部（旧東京高等師範学校附属中学蹴球部）が創部 100 年を迎えます（注：創部前から蹴球は盛んにおこなわれていましたが、「明治後」の部として正式に承認されて 100 周年ということです）。これを機に標記シンポジウムを、「スポーツを通しての"ゆたかなくらしづくり"」を"志"に掲げる NPO 法人サロン 2002 で企画しました。

「日本サッカーのルーツを語ろう！」は、2016 年 12 月 17 日に「東京高等師範学校の足跡を中心に」のサブタイトルのもと実施しています。明治期に日本にサッカーが伝わり、東京高等師範学校（東京高師）蹴球部が起点となって全国にサッカーの"種"がまかれていく過程を、「日本サッカーのルーツ校」である東京高師の使命や校風を絡めて語り合いました。今回はその「Part2」として、サッカーの"種"と"魂"を受け取った「学校」とその「卒業生」が、どのようにサッカーに取り組み、展開していったのかを取り上げます。

東京高師附属中学サッカー史をひもとくと、日常的な"遊び"を組織化するや部活動が成立してきたことや、卒業生が進学先の学校にサッカー部を作り、サッカーの組織を作り、OB となっても各界からサッカー界をサポートし続けたことがわかります。サッカー総堂掲額寄与 5 名います。このような事例を再確認しながら、100 年前の部活動のはじまりと、その後のサッカーの発展をみていきたいと思います。

100 周年を迎えるのは東京高師附属中だけではありません。2021 年に学校創立と蹴球部創立 100 周年を迎えた神奈川県立湘南高校も、東京高師卒業生の学校長・蹴球部顧問のもとで「文武両道」を志向しました。当初野球部を置かなかった背景には「野球害毒論争」の影響がみられます。いまにつながる部活動の議論が、この時代にみられます。

シンポジウム終了後は、同会場にて懇親会を企画しています。「日本サッカーのルーツ」を語るとともに、部活動のいまとこれからを、多くの方々とざっぱらんに語り合えることを願います。

特定非営利活動法人サロン2002
理事長　中塚義実

記

名　称 ： NPO サロン 2002 公開シンポジウム 2023
日本サッカーのルーツを語ろう Part2－東京高等師範学校附属中学蹴球部の 100 周年を機に
主　催 ： 特定非営利活動法人サロン 2002
後　援 ： 日本部活動学会、明芳サッカー倶楽部、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ
協　力 ： 日本サッカー史研究会、日本ヤタガラス協会
日　時 ： 2023（令和 5）年 11 月 23 日（木祝）14:30～17:00 （14:00 受付開始）
注）17:00～19:00 同会場で懇親会（※会費は別途ご案内します）
会　場 ： 筑波大学附属高等学校「相談会館」 〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1
有楽町線「護国寺駅」徒歩約 8 分、丸の内線「茗荷谷駅」徒歩約 10 分
注）オンラインでも参加できます（参加申込された方に Zoom の URL をお送りします）
登壇者 ： 関　佳史 （一社）神奈川県サッカー協会会長／湘南高校 OB
石塚友司　長良女子大学研究院生活環境科学系教授（スポーツ社会学）
中塚　義実（※コーディネーター兼） NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭
参 加 費 ： 1,000 円（サロン 2002 ファミリーは無料です）
参加申込 ： イベント運営管理サイト「Peatix」よりお申し込みください。
https://peatix.com/event/3718390
問い合わせ　https://www.salon2002.net/?page_id=102
参考資料 ： NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2016
「日本サッカーのルーツを語ろう！ －東京高等師範学校の足跡を中心に」
https://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2016_sympo.pdf
1

2023 年 11 月 23 日公開シンポジウム
『日本サッカーのルーツを語ろう! Part2』 案内チラシ

公開サロン報告
大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校

はじめに

筑波大学附属高校の会議室での開催はメチャクチャ久しぶりです。コロナあけで何度か筑波大学附属高校を会場に公開シンポジウムや公開サロンをやってはいますが、公開シンポは桐陰会館から、公開サロンは体育教官室からの発信でした。会議室は久しぶりですね。

今日の大まかな流れです。

Ⅰ．大戦前の日本サッカー－二つのルーツ校を中心に
　1）ルーツ校①　東京高等師範学校蹴球部
　　・初代部長（坪井玄道）と初代主将（中村覚之助）のころ
　　・学校体育を通してのサッカーの普及
　　・大日本蹴球協会をめぐって－創設と協会旗の制定（内野台嶺）
　2）ルーツ校②　東京高等師範学校附属中学蹴球部
　　・高師のお膝元でのサッカーのはじまり
　　・チョウディンとの出会いとレベルアップ
　　・卒業後のサッカー－進学先で次々にサッカー部を創設
　　・大日本蹴球協会をめぐって－創設（新田純興）と 1929 年の“政変”
Ⅱ．今後に向けて
　1）コロナ禍での動き
　2）「100 周年」のタイミングで…
　3）部活動改革の流れの中で…

昨年度の公開シンポジウムでも取り上げましたが、日本サッカーのルーツ校である東京高等師範学校、いまの筑波大学蹴球部は創部 130 年になろうとしています。そしてもう一つのルーツ校、東京高師附属中学、いまの筑波大学附属中高蹴球部は 2024 年に 100 周年を迎えました。

このタイミングで、大戦前の日本サッカーを改めて振り返っておこうと思います。

いろんな記録が残っています。それらをひもとく中で、ビルマ人、チョウディンとのくだりを改めてみておきたいところです。賀川浩さんが神戸一中とのかかわりについて書かれていますが、もとはといえば附属中の少年たちが先にチョウディンと出会い、大戦前の日本サッカーのレベルアップに貢献しています。また、附属の卒業生は、行った先々でサッカー部を作りまくっています。

大日本蹴球協会創設の際、東京帝国大学を出たばかりの新田純興さんが事務的なところで貢献され、初代会長には今村治吉さん。いずれも東京高師附属中（附属）の卒業生です。牛木素吉郎さんがよく言われていた日本サッカー協会（JFA）の「クーデター」。師範学校系の方々によって創設された JFA ですが、1929 年の役員改選で大学関係者が中心になってきます。よくみるとその方々の多くは附属の卒業生なんです。このあたりにも触れていきたいと思います。

大戦前の日本サッカー：二つのルーツ校を中心に　①東京高等師範学校

■ 日本サッカー殿堂掲額者

日本サッカー殿堂に、東京高師～東京教育大出身者はいま５名が掲額されています。６人目にはいずれJFA 現会長の田嶋幸三さんが入ってくるでしょうが、その前に 2024 年度、成田十次郎先生を推薦しています。初代主将・中村覚之助についても働きかけます。

坪井玄道さんは日本にサッカーを初めて活字で紹介された方で、東京高師蹴球部の初代部長。内野台嶺さんは今日の話のいろんな場面に出てきます。

サッカーを学校体育の教材として明確に位置づけることにご尽力された多和健雄さん、東洋工業黄金時代のセンターバックの小澤通宏さん、審判の高田静夫さんは日本人初のワールドカップレフェリーです。

附属の卒業生も５名掲額されています。大日本蹴球協会初代会長の今村次吉さんは６回卒、協会創設に尽力された新田純興さんは 24 回卒。いまの高校３年生が 133 回ですから、およそ 110 年前の人ということになります。鈴木重義さんは早稲田サッカーの創始者でベルリンオリンピックのときの代表監督。チョウディンとのかかわりもこの方がきっかけです。このお三方が戦前の方になります。

島田秀夫さんはＪリーグが始まったときの JFA 会長で、諸橋晋六さんは「ダイヤモンドサッカー」の放送や 2002 年 FIFA ワールドカップ招致に貢献された三菱グループの大御所です。これらの方が、東京高師附属中の卒業生で日本サッカー殿堂入りされている方です。

日本サッカー協会 HP

■ 近代サッカーの誕生と日本への伝来

ここからは授業のような話になっていきます。

世界中にフットボールのルーツがあります。フィレンツェのカルチョは有名ですよね。しかし今日の、世界に広がったフットボールのルーツと言えば、やはり大英帝国が発祥となります。

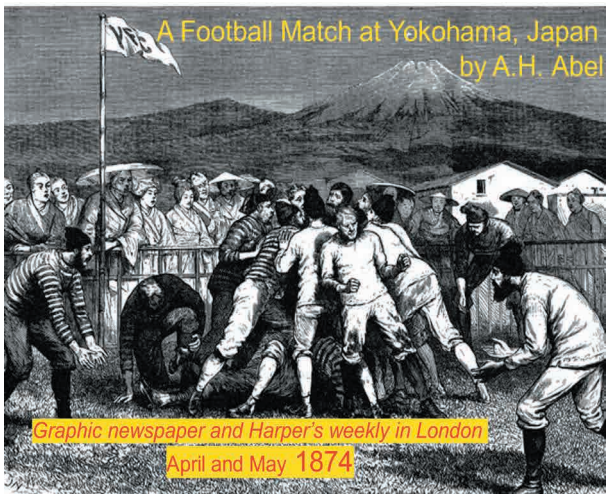
遊び、あるいは祭りとして、中世英国の農村ではキリスト教の祝日に各地でフットボールが行われていました。都市化の進行や人口の都市流出などで、農村のフットボールは日本の村祭りと同じようにすたれていきますが、それでもいまだに英国中の 10 数か所でやっているそうです。

その後フットボールは 18 ～ 19 世紀ごろのパブリックスクールの校庭で、学校独自のルールで行われるようになりました。ラグビー校で行われていたフットボールと、イートン校やハロー校で行われていたフットボールはルールが異なります。ホグワーツ魔法学校のクィディッジのように、基本的には校内の寮対抗で行われるものだったので学校内で完結し、統一ルールは必要ありません。しかしパブリックスクールの卒業生は大学へ進学します。ケンブリッジやオックスフォードでフットボールをやることになったとき、出身校が違うとルールが異なり困ってしまいます。そこで大学の中でルールの整備が進みます。

そのころ学校以外にもクラブが生まれます。強いクラブと試合をしたい。けどルールがまちまちなのでその都度調整しないといけない。そこでフットボールの統一ルールをつくるための会議が、1863 年に何度か開

かれます。論点は、ボールを持って走ってよいかと、すねを蹴ってよいかどうかです。いずれもダメとするサッカールールが主に採用され、The Football Association（FA）が設立されます。このルールを受け入れられないラグビー派の人たちは、8 年後の 1871 年にラグビーフットボールユニオン（RFU）を設立し、近代スポーツとしてのサッカーとラグビーが分化するのです。

当時の英国は世界中に植民地を持つ大帝国でした。フットボールは英国の商人や軍人、留学生たちによって世界中へ広がります。最初は中部ヨーロッパへ。そして北欧や南欧、スペインやイタリアへ。さらに南米、そしてアジアへと伝えられます。



1874 年にロンドンで紹介された有名な絵です。後方に富士山が描かれています。旗には YFC の文字が。横浜フットボールクラブでラグビーをやっているところだとされていますが、ラグビーともサッカーとも言いようがない光景です。それを和服姿の日本人が物珍しそうにみている絵です。日本に来た外人さんが、それまで日本人が見たことのないような遊びをやっているところです。

日本へのフットボールの伝来

◆外国人居留地に“クラブ”が生まれる
1868（明治元）年　YC&AC（横浜外人クラブ）
1870（明治3）年　KR&AC（神戸外人クラブ）

◆軍人や教師によって近代スポーツが紹介
1872（明治5）年　野球伝来
1873（明治6）年　サッカー伝来

◆教育制度が整えられ、「体操」が導入される
「体操伝習所」（1878～1885）「遊戯」紹介
1886　東京高師体育専修科に改組
1893　東京高師に嘉納治五郎校長着任！

整理すると、日本にやってきた外国人の居留地にクラブが生まれます。YC&AC は明治元年、KR&AC は明治 3 年にできます。日本で最初にできたクラブは外国人のクラブで、その周辺の人々は、スポーツに触れる機会も多かったことでしょう。

もう一方で、スポーツは学校を通して広がります。野球は開成学校、いまの東京大学の英語教師、ホーレス・ウィルソンが紹介します。サッカーはダグラス少佐とその部下 33 名が築地の海軍兵学寮で行ったのが最初とされていますが、全国に広がったのは、学校教育を通してです。

明治期以降、近代的な教育制度が整えられ、体操が正課に位置付けられます。いまの体育です。体操を導入するために、それを教える先生を育てなくてはなりません。そのため体操伝習所が作られ、そこで遊戯、いまのスポーツが、体操とともに紹介されます。坪井玄道がフットボールを紹介したというのはこの流れです。体操伝習所は、その後東京高師に改組され、いまの筑波大体育専門学群につながります。そして東京高師の校長に嘉納治五郎が着任します。

■ 東京高等師範学校と嘉納治五郎

嘉納は柔道の創始者として有名ですが、アジアで最初の IOC 委員であり、日本のオリンピック運動の先駆けです。また大日本体育協会、いまの日本スポーツ協会を創設し、多くの留学生を受け入れた国際人でもあります。東京高師とその附属学校の校長を 20 年以上務めた教育者であり、私の勤務校の元校長です。スポーツの教育的意義を尊重した全人教育を展開し、校風はいまも生きています。

「桐陰会」はいまでいう生徒会と言えるものですが、在校生と卒業生がともに集う組織で、部活動の連合組織と言えるものです。嘉納が名付け、自ら会長となり、学校行事や部活動を通して全人教育を展開します。各部は「桐陰会柔道部」「桐陰会剣道部」「桐陰会陸上部」「桐陰会野球部」「桐陰会蹴球部」のように桐陰会の一部門でした。桐陰会は多種目型のクラブと言えるでしょう。また卒業生も加わっていたので、多世代型のクラブとも言えます。20 世紀入ったころに、すでに多種目・多世代型のクラブが学校を母体に成立していたのだということです。このほか、冨浦の寮を用いた臨海学校（冨浦生活）、蓼科の寮を用いた林間学校（蓼科生活）があり、修学旅行も附属が先駆けです。100 年以上もこれらの行事は続いており、全国の学校へ広がっていきました。

大河ドラマの「いだてん」は、視聴率が低く残念でしたが、東京高師周辺のできごとを、私は毎回わくわくしながら見ていました。嘉納校長のもとで、東京高師の学生も附属中の生徒たちも、活発に過ごしていたということです。

嘉納校長着任のころ、東京高師は湯島聖堂の並び、いまの東京医科歯科大学のあたりにありました。隣には女子高等師範、いまのお茶の水女子大です。お茶大はいま、筑波大学附属中高の向かい側にあるのですが、なぜ「お茶大」と言うのかといえば、もともと御茶ノ水にあったからですね。そこから 20 世紀に入るころに移転します。

1896（明治29）年3月　「運動会」設立

柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操部、ローンテニス部、フートボール部、ベースボール部、自転車部の八部に分ち、生徒は其の一部若しくは数部に入りて、毎日三十分以上必ず所属の部について運動をすること

ACミラン・FCバルセロナ（ともに1899年創設）より歴史あり！

1901（明治34）年10月　「校友会」に改組

1902（明治35）年4月　坪井玄道が欧米視察から帰国

1903（明治36）年4月　大塚窪町に移転

15

1896 年に「運動会」という組織が生まれます。柔道部以下、8 つの部が設置され、生徒は「その一部もしくは数部に入りて、毎日 30 分以上必ず所属の部について運動をすること」としていました。高等師範の卒業生は全国各地の師範学校や旧制中学校に赴任します。血の気の多い当時の若者を指導するには、勉強ができるだけではダメです。だからちゃんと体を動かして鍛えなさよということですね。「運動会」というのは、いまでいう運動部活動です。

筑波大学蹴球部は、運動会フートボール部が設置された 1896 年を創設の年としています。1899 年の AC ミランやバルセロナよりも歴史があるのです。

運動会は、20 世紀に入って「校友会」に改組されます。寄宿舎や、談話部などの文科系の組織も取り込んだ学生組織です。

ちょうどそのころ、坪井玄道が海外視察から帰国し、明治 36（1903）年に大塚窪町、いまの茗荷谷駅前に校舎が移転します。このあたりから中村覚之助が登場します。

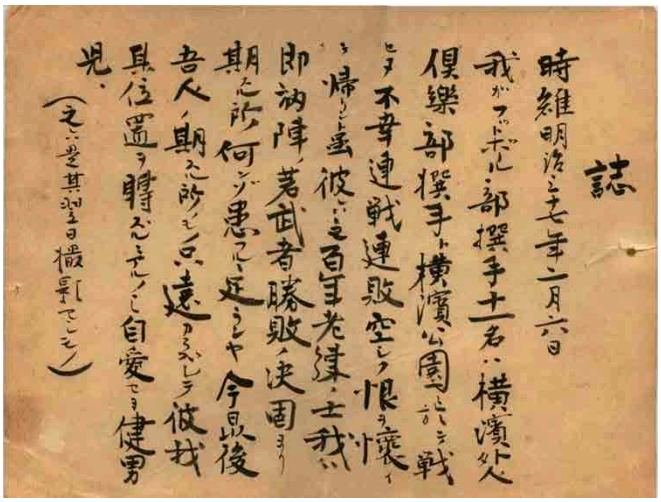
「全生徒は一足先にできた寄宿舎に入舎して、そこから 1 年間お茶ノ水に通った」。茗荷谷駅近くの校地に宿舎ができ、御茶ノ水まで通っていたということです。「大塚の新運動場の予定地は雑木雑草に埋められていたが、中村君以下部員一同整地に努め」、つまりグラウンドを作ったということですね。「ゴールを建てたりした。一方中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した」とあります。中村君はサッカーが得意だったわけではないけど、坪井玄道が持ち帰った数冊の洋書を訳し、活字としてフットボールを理解し、実地訓練を開始したという話です。

1903（明治36）年4月　大塚へ移転

「全生徒は35年5月、一足先にできた寄宿舎に入舎して、そこから1年間お茶の水に通った。大塚の新運動場の予定地は雑木雑草に埋められていたが、中村君以下部員一同整地に努め、蹴球のフィールドに棕櫚縄（しゅろなわ）を張りめぐらして石灰線の代用としたり、ゴールを建てたりした。一方中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した」（堀桑吉氏の寄稿より）

フットボールの聖地ともいえるその場所はいまもあります。茗荷谷駅からすぐのところに筑波大学東京キャンパスと放送大学の建物があり、その先に文京区スポーツセンター、その前に公園として整備されているグラウンドです。しかしいまは「ゴルフ、サッカー、野球等の球技はやめましょう」となっています。先日も附属サッカー 100 周年で文京区長が来られました。私はお会いするたびに「何とかしてください」とお伝えしています。

写真提供：中村統太郎



写真は、覚之助が著した日本で最初のサッカー専門書の復刻版です。この本のすごいところは、単なる訳本でなく、自分なりの考え方をしっかり入れているところです。

その下は日本で最初のサッカー試合に臨んだメンバーです。後列右から２人目が初代主将の中村覚之助です。制服を着ています。この試合には出ていません。当時日本でサッカーをやっていたのは横浜と神戸の外人倶楽部だけです。文献で学んだサッカーを、やってはみたけど実際にゲームをやらないとわからない。そこで横浜外人倶楽部に試合を申し込んだはいいが、相手にしてもらえません。２軍だったらやってもいいよと言われて試合に向かいますが 0-9 の完敗。その翌日にわざわざ神田の写真館まで行って撮ったのがこの写真です。日露戦争開戦直前の２月６日です。

写真の裏面には、覚之助の文字で、横浜公園で試合があったこと、連戦連敗だったこと、１点取られたら負けて次のゲームが始まるという感覚だったのでしょうか。すると９敗するわけですね。こちらは初心者だったので今回は負けてしまったが、これから頑張ってやっていくぞという心意気が買あかれています。ここが原点です。

■ 中村覚之助の功績

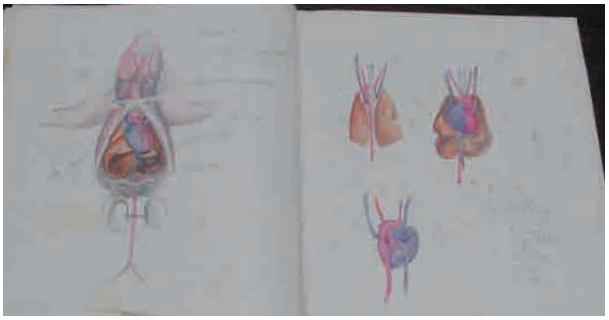
中村覚之助の略歴

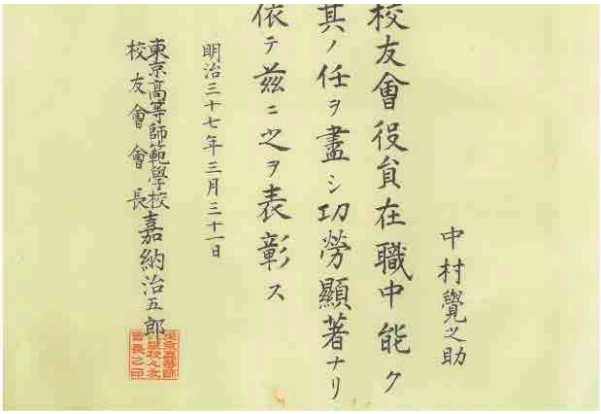
- 明治11（1878）年5月　和歌山県那智勝浦町で生まれる
- 明治32（1899）年3月　和歌山師範学校卒業
  4月　宇久井高等小学校にて教師になる
- 明治33（1900）年4月　高等師範学校博物科入学（22歳）
- 明治36（1903）年10月　『ｱｯｿｼｴｰｼｮﾝ・ﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ』出版
  ※東京高師　大塚窪町に移転（1903年4月）
- 明治37（1904）年2月6日　東京高師vsYC&AC
  3月　東京高等師範学校博物科卒業
  4月　東京府立第一高等女学校（現白鴎高）着任
- 明治38（1905）年　清国山東省済南師範学校に着任
- 明治39（1906）年7月3日　逝去（28歳）

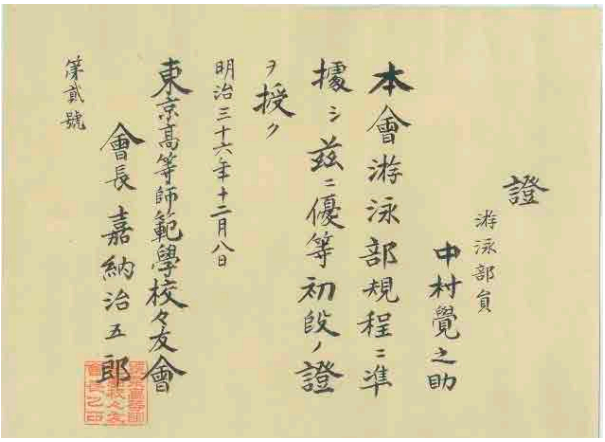
覚之助のことをもう少し押さえておきたいと思います。1878 年に和歌山県那智勝浦町で生まれた覚之助は、和歌山師範卒業後、地元の宇久井小学校の先生になりますが、翌年には高等師範学校へ。勉強も運動もできて絵も上手。リーダーシップも備えた地方の逸材は、和歌山から日本のリーダーとなるべく上京します。日本で最初のサッカー専門書を出したのは、東京高師が大塚窪町に移転した年です。そして覚之助が卒業する年の２月に YC&AC との試合が実現します。卒業後は府立第一高等女学校、いまの白鴎高校の先生になりますが、翌年、清国山東省済南師範学校に着任します。嘉納治五郎が中国から留学生を受け入れた裏返しで、優秀な指導者を中国に派遣した中の一人です。しかし覚之助はその翌年、若くして亡くなります。

このあたりは 10 年以上前に、サッカー史研究会でもサロン 2002 でも明らかにし、公開シンポジウム等で紹介しました。何度か現地にも赴きました。私はいまも年１回はお邪魔しています。

こちらが覚之助の生家です。覚之助の遺品が大事に保管されています。その中に、YC&AC との日本で最初のサッカーの試合の写真もありました。ほかにも博物学部の覚之助の授業ノートや表彰状など、貴重な資料が満載です。




中村覺之助
校友會役員在職中能ク
其ノ任ヲ盡シ功勞顯著ナリ
依テ茲ニ之ヲ表彰ス
明治三十七年三月三十一日
東京高等師範學校
校友會會長 嘉納治五郎


證
游泳部員
中村覺之助
本會游泳部規程ニ準
據シ茲ニ優等初段ノ證
ヲ授ク
明治三十六年十二月八日
第貳號
東京高等師範學校々友會
會長 嘉納治五郎

いずれも中村家の資料を中塚が撮影したもの

覚之助のノートは、全部このような感じでまとめられています。英語の勉強をした様子もうかがえます。当時の学生がものすごく勉強していたことがわかると思います。

卒業証書には「和歌山県平民　中村覚之助」と書かれています。校友会役員としての功績を賞されたものもあります。学校長は嘉納治五郎です。

卒業證書
和歌山縣平民
中村覺之助
明治十一年五月生
右ハ本校本科博物學部ノ
課程ヲ履修シ其ノ業ヲ卒ヘ
タリ依テ茲ニ之ヲ證ス
明治三十七年三月三十一日
東京高等師範學校長正五位勲四等嘉納治五郎
第五十七號

覚之助は蹴球部だけでなく、遊泳部、いまの水泳部員でもありました。那智勝浦で幼い頃から泳いでいたのでしょう。泳力優秀で初段という賞状もあります。嘉納治五郎は水泳についても段位制を導入しようとしていたようです。

そして遺品の中に、英文の雑誌や新聞記事があります。覚之助のお兄さんのお孫さんにあたる中村統太郎さんにお聞きしました。那智勝浦での生活に現金は不要だが、東京で勉強するには交通費や生活費などのお

金がかかる（東京高師は授業料はかからない）。覚之助とその弟、妹はいずれも勉強ができたので上京して大学に行ったのですが、そのためには現金が必要です。そのためお兄さんが出稼ぎに行きます。行き先はオーストラリア。そこで洗濯屋さん、クリーニング屋さんをやって現金収入を得て、弟や妹に仕送りをしていたとのことです。兄が英語圏に出かけたものだから、覚之助はおそらく英語の資料を送ってほしいと依頼し、独学で英語を勉強したのだろうと。それが衣装ケースに入っているいくつかの文献です。

この絵も覚之助が描いたものです。ナポレオンとビスマルクですね。何を思って描いたのでしょう。とにかく絵心もある。すごい人です。

そして覚之助の後輩たちが全国各地に教師として赴任し、「赴任先にゴールポストを」を合言葉にサッカーを広めていったということです。

その覚之助の訃報が、内野台嶺在学中に届きます。

横浜出身の内野台嶺もおそらく寮生活をしていたことでしょう。学生寮には卒業生からの便りがたびたび届き、それが校友会の機関誌に記録として残されています。

東京高師校友会誌 第10号（1906年6月?）

○当部の始祖、中村覚之助君は遠く清國に在りても深く我が部の為めを思はれ、當部活躍発展の一助として、多数の金員を寄送せられる。部員一同の感佩（かんぱい）する所なり。（略）一同は不肖なりと雖も、此等の厚志を空うせざらんことを期し、更に邦家の為め、奮励一番、全力をあげて此の技の研鑽に盡し努力勤勉以て其効果を全うからしめんことを期す。

○近来各種の学校に、この技の盛に行はれんとする傾向あるは、邦家為め、吾人は双手をあげて之を祝するものなり。

校友会誌第 10 号には、「当部の始祖、中村覚之助君は、遠く清国に在りても深く我が部のためを思われ、当部活躍発展の一助として多数の金員を寄送せられる」、つまり後輩のために仕送りしてくれたことが記録されています。それが 1906 年 6 月ごろの記事です。YC&AC との最初の試合から 2 年ほど経った頃の話です。「近来各種の学校に、この技の盛んに行われんとする傾向ある」はとてもうれしいということが書かれています。高等師範の在校生による巡回指導や、卒業生が赴任地にゴールポストを立てていった成果が少しずつ見え始めてきたことが書かれています。

東京高師校友会誌 第11号（1906年10月?）

○青山師範よりの競技法教授依頼

○本科一年対本科二三年マッチ

○打ち合わせ茶話会

～十月十日打ち合わせ茶話会を有朋館に開きぬ。部員集まるもの五十餘名、部長坪井先生は特に臨席せられて、欧米に於けるフットボールの状況等に就て談話ありたり～

○本科一年文科、理科対抗マッチ

○故中村覚之助君を想ふ

七月九日我が蹴球部創設者中村覚之助君の訃報に接せり。君は明治三十七年三月本科博物科を卒業し、清國山東省済南府師範学堂に教鞭を執られしが、病を得、夏季休暇を利用して、故国に帰り療養せむとし、六月二十八日神戸に着したりしが、～

東京高師校友会誌 第11号（1906年10月?）

～六月二十八日神戸に着したりしが、七月三日病遂に革まり同夜、溘然（こうぜん）不帰の客となられたり。吾部は君の過去に於ける功労を思ひて、実に悼惜に堪へざるなり。吾部の創設や全く君の力によれり。

吾部の名にて出版せられし「アッソシエーション、フットボール」は實に君が自ら筆を執られしものなり。当時我国に於てフットボールの智識を有するものなく、依る可き書も稀なりしを、奮然此擧に出でられし熱心思ふべし。爾来瞬時も我が部を念頭より去らず、或は多大の金員を贈り、其他種々の方法を以て、選手を指導し奨励せられ、常に吾部の為にのみ謀られたりしが、此度はからずも其訃音に接しぬ。然れども我等は信ず、君の霊は永久に吾部の護身となりて指導せらるべきを。吾等は君が生前の功労を追想し、其遠逝を痛惜し茲に恭しく弔意を表す。

次の第 11 号には、青山師範からの指導依頼があったことや、1 年対 2、3 年の試合をやったこと、打ち合わせ茶話会には蹴球部員が 50 名以上集まり、部長の坪井先生から欧米のフットボールの状況について話があったことが書かれています。羨ましいですね、青山師範は豊島師範と合併していまの東京学芸大学につながる学校です。

そして、「故中村覚之助君を想ふ」という記事があります。「7 月 9 日我が部の創設者中村覚之助君の訃報に接せり」という書き出しです。清国で教鞭をとられていたが病気になり、夏季休暇を利用して帰国しようとして神戸に着いたところ、7 月 3 日に帰らぬ人となってしまったとのことです。

「我部の名にて出版せられし『アッソシエーション・フットボール』は実に君が自ら筆をとられしものなり」「我等は信ず、君の霊は永久に我部の護身となりて指導せるべきを」。

偉大な先輩、遠方にあっても部のことを思ってくれていた人が亡くなったことは大きな衝撃を在校生に与えたことでしょう。その中に、1年生の内野台嶺さんもいたはずです。

まとめます。

東京高師蹴球部は“日本サッカーの宗家”です。赴任した学校にゴールポストを立て、学校を基盤とする日本サッカーの発展に貢献した。その開祖が中村覚之助です。

中村覚之助の功績は、日本で初めてサッカーの専門書を書いて出版し、初めてサッカーの対外試合を企画・実行したことであり、これをもって日本サッカーの“始祖”ということができるでしょう。

ここまでのことはすでに10年ほど前に明らかにされており、覚之助を日本サッカー殿堂に推薦する動きを試みたのですが、なかなか前に進まず、いまに至っています。

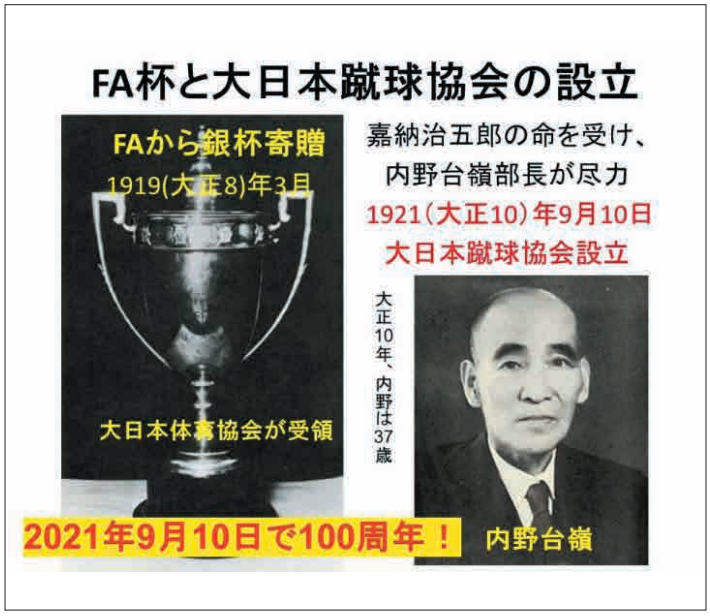
中村覚之助の功績

◆東京高師蹴球部は“日本サッカーの宗家”である！
「赴任した学校にゴールポストを立てよう！」
学校を基盤とする日本サッカーの発展に貢献した
その開祖は中村覚之助

◆中村覚之助の功績
・日本ではじめてサッカーの本を編集・著作・出版した
明治36(1903)年 『アッソシエーション・フットボール』
・日本ではじめてサッカーの対外試合を企画・実行した
明治37(1904)年 東京高等師範学校 0-9 YC&AC

サッカーを日本にはじめて全面的・本格的・系統的に紹介
日本サッカーの“始祖”

■ 極東大会～JFA創設～全日本選手権～シンボルマーク



普及面だけでなく、レベルアップの面でも東京高師が貢献します。第3回極東選手権に出場するために日本代表が初めて編成されますが、当時日本人でサッカーを本格的にやっていたのは東京高師ぐらいだったので、そのまま日本代表として出場します。しかしボロ負け。これではいかんということで、関東、東海、関西で蹴球大会が開かれます。いずれも新聞社の主催や後援を受けたものです。

東京で行われた関東蹴球大会をご覧になった英国大使が、日本でもフットボールの大会が始まったことを本国に伝えたのでしょう。日本のチャンピオンチームに渡してほしいと、イングランドサッカー協会（FA）から銀杯が寄贈されました。トロフィーは大日本体育協会会長の嘉納治五郎のもとに届きます。しかし当時、サッカーの全国組織はありませんし全国大会もありません。そこで東京高師蹴球部長であった内野台嶺に、日本一を決める大会を作ることと、そのための組織を作ることを嘉納は指示します。冒頭に出てきた新田純興の自宅で何度も何度もミーティングが開かれたのはこのときです。

サッカー殿堂に掲額された内野台嶺については右のように紹介されています。1921年のJFA創設に無尽の貢献をされたこと、1931年に採用されたJFAのシンボルマークは「内野らの発案を日名子実三氏がまとめたもの」です。わが国初のクラブチーム東京蹴球団を結成し、関東蹴球大会をはじめたことも挙げられています。

内野台嶺

日本サッカー殿堂　掲額者紹介より（一部編）

1884年4月29日、神奈川県生まれ
郁文館中 → 東京高等師範学校卒業、
漢文学者。曹洞宗大乗寺住職

東京高師で校友会蹴球部部長を務めていた1919年、大日本体育協会会長・高師校長の嘉納治五郎氏とともにイングランド協会よりFAカップを受領。**1921年のJFA創設に無尽の貢献**をした。JFA創設後も初代理事の一人として運営の中心を担った。

また、**1931年に採用されたJFAのシンボルマーク**「三本足烏」は、内野らの発案を日名子実三氏がまとめたものである。

1909年に赴任した豊島師範学校やその後教鞭をとった高師では、部の強化を図りサッカーの普及に努めた。**1917年、高師、豊島、青山の三師範を中心としたわが国初のクラブチーム「東京蹴球団」を結成**させ、日本サッカーの底上げと普及に力を注ぎ、学校中心であったサッカー界に新風をもたらした。

1918年に東蹴主催で始まった関東蹴球大会では大会委員長を務めるなど関東のサッカーの発展にも尽力し、後、関東協会会長を務めた

この方は、文京区にある郁文館の卒業生です。郁文館ではあまり知られていなかったようですが、郁文館の先生方にお伝えし、いまでは知られるところとなっています。しかし学校HPを検索してもヒットしません。

こうしてはじまったのが、いまの天皇杯につながる全日本選手権大会です。

いまの全国高校サッカー選手権大会は、その少し前に関西で始まった日本フートボール大会からつながります。1917年に東京、東海、関西で始まった旧制中学と師範学校の大会のうち、大阪毎日新聞社主催の日本フートボール大会に一本化されたものです。初期のころは御影師範の連続優勝が続き、神戸一中が一度優勝。第10回大会からは全国大会となり、崇実（スンシル）という平壌のチームが優勝しています。

関東大学リーグの方は、第1回が早稲田、第2回が東京高師、第3回から東京帝大が6連覇します。

少しずつレベルアップしていきます。1930年の極東大会には初めて優秀選手を全国から選抜して日本代表を編成します。監督の鈴木重義は附属の卒業生です。主将は竹腰重丸。フィリピンに勝って中国と引き分け、初めてアジアを制します。

（天皇杯）全日本選手権大会

回	年度		優勝	準優勝
1	大10	1921	東京蹴球団	御影蹴球団
2	大11	1922	名古屋蹴球団	広島高師
3	大12	1923	アストラ・クラブ	名古屋蹴球団
4	大13	1924	鯉城クラブ	全御影師範クラブ
5	大14	1925	鯉城蹴球団	東京帝大学
6	大15/昭元	1926	※大正天皇崩御のため中止	
7	昭2	1927	神戸一中クラブ	鯉城クラブ
8	昭3	1928	早大WMW	京都帝大学
9	昭4	1929	関学クラブ	法政大学
10	昭5	1930	関学クラブ	慶応BRB
11	昭6	1931	東京帝大LB	興文中学
12	昭7	1932	慶応クラブ	芳野クラブ
13	昭8	1933	東京OBクラブ	仙台サッカークラブ
14	昭9	1934	※極東選手権準備のため中止	
15	昭10	1935	全京城蹴球団	東京文理大学
16	昭11	1936	慶応BRB	蓍成専門
17	昭12	1937	慶応大学	神戸商大学
18	昭13	1938	早稲田大学	慶応大学
19	昭14	1939	慶応BRB	早稲田大学
20	昭15	1940	慶応BRB	早大WMW
21	昭16	1941	※戦争のため諸行事中止	
22	昭17	1942	※戦争のため諸行事中止	
23	昭18	1943	※戦争のため諸行事中止	
24	昭19	1944	※戦争のため諸行事中止	
25	昭20	1945	※戦争のため諸行事中止	

関東大学リーグ

回	優勝
1	早稲田大
2	東京高師
3	東京帝大
4	東京帝大
5	東京帝大
6	東京帝大
7	東京帝大
8	東京帝大
9	慶應義塾
10	早稲田大
11	早稲田大・慶應義塾
12	早稲田大
13	早稲田大
14	慶應義塾
15	慶應義塾
16	慶應義塾
17	慶應義塾
18	早稲田大・東京帝大
19	東京帝大
幻大会	（東京帝大）
―	中止
―	中止

全国高校選手権大会

回	年度	優勝	準優勝
1	1917	御影師	明星商
2	1918	御影師	明星商
3	1919	御影師	姫路師
4	1920	御影師	姫路師
5	1921	御影師	神戸一中
6	1922	御影師	姫路師
7	1923	御影師	京都師
8	1924	神戸一中	御影師
9	1925	御影師	広島一中
―	1926	中止	
10	1927	崇実	広島一中
11	1928	御影師	平壌高
12	1929	神戸一中	広島師
13	1930	御影師	広島一中
14	1931	御影師	愛知一師
15	1932	神戸一中	青山師
16	1933	岐阜師	明星商
―	1934	中止	
17	1935	神戸一中	天王寺師
18	1936	広島一中	韮崎中
19	1937	埼玉師	神戸一中
20	1938	神戸一中	滋賀師
21	1939	広島一中	聖峰中
22	1940	蓍成中	神戸三中
23	1941	※戦争のため中止	
24	1942	※戦争のため中止	
―	1943	中止	
―	1944	中止	
―	1945	中止	

第9回極東選手権大会（1930年）
日本代表　アジア初制覇！

初めて予選を行わず、優秀選手を全国から選考した

監督　鈴木重義
主将　竹腰重丸

5/25　○7-2フィリピン
5/29　△3-3中国（両国優勝）

その翌年（1931）、日本サッカー協会のシンボルマークが決まる

大日本蹴球協会機関誌『蹴球』第2号（1933年2月発行）「昭和7年度全国代議員会議事録」（1932年11月6日）には「三、協會旗を日名子氏案（原参照）に定む」とある。このとき内野台嶺47歳。日名子実三38歳

JFA のシンボルマーク

その翌年、サッカー協会のシンボルマークが決まります。「協会旗を日名子氏案に定む」と、JFA 機関誌に議事録が載っています。3 本足の烏ですね。

この由来について、いろんな話がありました。「発案者の内野台嶺は、日本サッカーの“始祖”中村覚之助の出身地を思って八咫烏を採用したのではないか」というのもその一つです。当時の時代背景から、八咫烏はよく知られたキャラクターでしょう。一方、漢文学者の内野台嶺にしてみると、三本足の烏は中国の文献にもみられることはご存じだったはず。中国由来の話としてなのか八咫烏としてなのか、内野がどう考えたのかはわかりませんが、日本サッカー協会が進むべき方向性をシンボルマークに表すとするなら、道先案内としての八咫烏はうまくフィットしたと言えるのではないでしょうか。実際にデザインされた日名子実三の芸術センスもさすがですね。

各国のエンブレムを並べてみました。スリーライオンズから始まって、ドラゴンや鷲、フランスは鶏です。ブラジルやアルゼンチンは動物ではありません。ナイジェリアはイーグル。アジア各国も挙げておきました。

JFA50 年史『日本サッカーのあゆみ』は新田純興がまとめられたものですが、「協会旗・マークの意義」としてスライドのように記されています。「東京高等師範学校の内野台嶺教授を中心とする人たちの発案を、図案会の雄、日名子実三がまとめたもの」であり、「中国の古典」や「日本の神話」が由来であることが紹介されています。もう少しマニアックなところで言うと、『東京教育大学サッカー部史』には「日本蹴球協会の三足烏のいわれ」として次のような記述があります。「東京高等師範の生徒が考案した図案であると

「協会旗・マークの意義」 新田純興

『日本サッカーのあゆみ』1974年2月4日発行

1931（昭和6）年6月3日、理事会は正式に協会のマークを採用した。

●協会旗・マークの意義

マークは、東京高等師範の内野台嶺教授を中心とする人たちの発案を、図案会の雄、日奈子実三（ママ）がまとめたものである。中央にいるのは、ボールを押さえている3本足の烏。3本足の烏は、日の神太陽を表している。中国の古典、『淮南子』という本と『芸文類聚』という本の2箇所に、太陽の中に3本足の烏がいるとみえていることと、また日本の神話の中にも、神武天皇が大和国へ入られるとき八咫烏が険阻な山路のご先導をしたということをあわせ、ここから光が輝いて四方八方を照らすことを意味している。ボールを押さえているのは、われらのボールゲーム、サッカーを統制・指導し、正しく発達し、栄光を世界に輝かせることを意味している。

旗の色、黄色は公正・フェアを示し、青色は青春・若さを表わし、全体としてはつらつとして若さ、青春の意気に包まれたわれら日本のフットボーラーの、フェアかつ偉大な心構えを表現しているのである。

「日本蹴球協会の三足烏のいわれ」 小長谷亮策

『東京教育大学サッカー部史』1974年2月発行

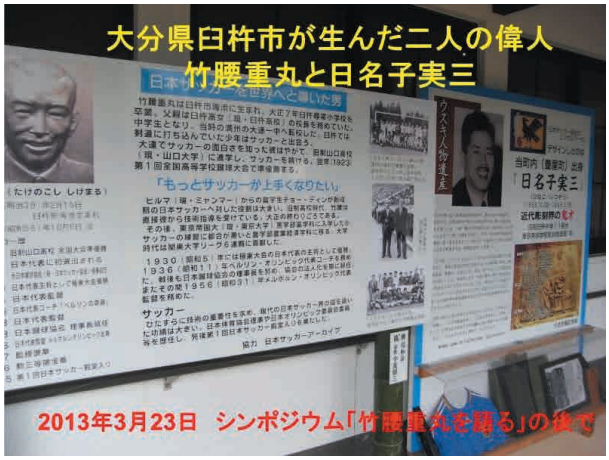
日本蹴球協会の会旗や徽章に、黄色地に三本足の烏がボールを抑えているが、これは太陽の中に三本足の烏がいるという故事にもとづいているものである。そしてこれは大正の終りだったか昭和の初めの頃だったか、東京高等師範の生徒が考案した図案であるといわれているが、それが誰であったかわからないということである。もしこれを読んで心当りの方があったら、是非お知らせ願いたいものである。私は蹴球界の育ての親ともいっていい先輩の内野台嶺先生（漢文学教授で私どもの頃の蹴球部長）から聞いて調べた。三足烏の出展と太陽と烏との関係などの記録を記して参考に供したいと思う。（以下略）

いわれているが、それが誰であったかわからない」「もしこれを読んで心当たりの方があったら、是非お知らせ願いたい」。これは 1974 年に書かれたものです。この後、「内野台嶺先生から聞いて調べた」話が続きます。

内野先生は蹴球部長であるとともに、高等師範の漢文の先生です。それだけでなく、附属中学でも漢文を教えておられました。高等師範の生徒が考案したと書かれていますが、もしかすると附属中学の漢文の授業中に、内野先生が「今度サッカー協会のシンボルマークを決めるのだが、君たち何かいいアイデアないかな」と投げかけたかもしれません。すると附属中の元気な子たちが、「八咫烏がいいのではないでしょうか」と答えるシーンが容易に想像できます。あくまでも想像（妄想）でしかありませんし、もはや証明のしようもありません。けど、こんな話で盛り上がるのも楽しいですよね。

注）JFA のオフィシャルサイトの Q&A「JFA のシンボルマークの意味は？」では、次のように記載されている。JFA の旗章に用いられている「三本足の烏」は、中国の古典にある三足烏と呼ばれるもので、日ノ神＝太陽を図案化したものです。1931（昭和 6）年 6 月の大日本蹴球協会の理事会で旗章（シンボルマーク）の採用を決め、翌 1932 年の全国代議員会で彫刻家の日名子実三のデザインを協会旗に定めることを決定しました。中国の三足烏の説話は早くから朝鮮半島北部にあった高句麗に伝わり、その後、東アジア各地にも広まっていきました。そして日本にもこの思想が伝わったため、次第に八咫烏と混同されて八咫烏が三本足で描かれるようになっていきました。八咫烏は、日本の建国神話の中の神武天皇東征の説話に登場する神の使いで、日名子はこれをモチーフに JFA の旗章を制作しました。しかし、神武東征の物語を伝える『古事記』や『日本書紀』には八咫烏が三本足だったという記述はなく、また三足烏がもともと中国の説話にあることから、JFA としては、旗章の由来が単に神武東征神話に登場する八咫烏であるだけでなく、『淮南子』などの記述などから中国由来のシンボルでもあるとしています。　出典：『日本サッカー協会百年史』

■ 臼杵市を訪ねて



日本サッカー史研究会と法人化前のサロン 2002 で、2013 年 3 月、もう 10 年以上前になりますが、竹腰重丸の出身地、大分県臼杵市を訪ねるツアーに出かけました。メインは竹腰重丸でしたが、行ってみるとそこは日名子実三の出身地でもあり、両者が並んで紹介されていました。知らなかったので驚きました。

神武天皇と八咫烏
（日名子実三作）

日名子は戦前の日本を代表する彫刻家で、スポーツのメダルや、神話をモチーフにした作品を多く残しています。東京美術学校、いまの東京芸術大学美術学部の出身です。神武天皇の頭上に八咫烏が乗った彫刻は、地元の方が保管されていました。

1893 年　大分県臼杵市に生まれる
1912 年　大分県立臼杵中学卒業
　　慶応義塾大学部理財科に入学
　　親に無断で夏ごろ退学
1913 年　東京美術学校彫刻科に入学
　　朝倉文夫の朝倉塾に入る。
1918 年　東京美術学校を首席で卒業
1926 年　「構造社」結成
1928 年　フランス留学。
　　欧州各地を歴訪。数多くのメダルを持ち帰る。
1931 年　JFA のマーク制定
1932 年　ロサンゼルス五輪に出品
1936 年　ベルリン五輪に出品
1945 年　51 歳で死去

日名子が欧州各地を歴訪したのは第 1 次大戦が終わり、ヨーロッパがつかの間の平和を味わう時代でした。スポーツも盛んで、ヨーロッパのアーティストはスポーツのメダルやトロフィーに、ギリシャ神話の神様をモチーフにした作品が多く作られました。日名子もこれらに刺激を受けたのではないかと考えられます。

日名子は戦前のオリンピックに出場しています。といってもスポーツではありません。オリンピックに芸術種目があった時代の話です。51 歳で亡くなられた日名子が JFA のシンボルマークをデザインしました。

彼は留学中、ベルギーのブリュッセル郊外にあるワーテルローの古戦場にあるライオン像をみる機会があったと思われます。1918 年に建った像なので、日名子の留学時にはすでにあるわけです。

成田家にあるライオンのミニチュア版

このことを指摘されたのは、故成田十次郎先生でした。最後にお会いした「サッカー×アート」のシンポジウム（後述）で、成田先生がご自宅にあったミニチュアのライオン像を手にされ、「3 本足の烏がボールを押さえて横を向いている姿は、ワーテルローの丘のライオン像をみてイメージしたに違いない」と話されました。ライオンが押さえているのはボールではなく大砲です。4 本足のライオンが足を大砲に乗せて横を向いている。JFA のマークは 3 本足の烏がボールに足を乗せて横を向いているところです。「中塚くん、これを明らかにしてくれないか」というのが、シンポジウム後に成田先生からあった電話のなかみでした。それが最後の会話となりました。

臼杵ツアーの話の続きですが、みなで散歩していると熊野神社がありました。熊野神社は全国各地にあるので珍しいことではありませんが、そこのあずまやに掲げられていた絵馬に驚きました。八咫烏です。

神武天皇東征の出発点は宮崎県の高千穂峡のあたりです。瀬戸内経由で大阪～和歌山、そして那智勝浦のあたりで上陸して八咫烏の導きで大和へ向かうことになっていますが、神武天皇ご一行が高千穂からどのルートで九州を北上されたかは諸説あるようです。臼杵の熊野神社の絵馬は、臼杵の港から船出するご一行を 3 羽の八咫烏が導いているようすです。

八咫烏神話は熊野や大和だけでなく、いたるところにあるのですね。

東京高師の卒業後は全国各地へ！

赤木愛太郎は明治33（1900）年3月卒

明37(1904) 中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明38(1905) 牧野 信寿 →広島師範　伊藤長七はこの学年
明39(1906) 堀 桑吉 → 愛知第一師範
明41(1908) 細木 志郎 →埼玉師範
明42(1909) 内野 台嶺→豊島師範→東京高師
明42(1909) 落合 秀保 →滋賀師範　錦織兵三郎、成田千里はこの学年
明42(1909) 玉井 幸助 →御影師範
明44(1911) 松本 寛次 →広島一中
大 3(1914) 高橋 英治 →刈谷中　「いだてん」金栗四三の同期生
大 9(1920) 北村 春吉 →静岡師範
大10(1921) 和田 邦五郎 →東京高師附属中
大13(1924) 後藤 基胤 → 湘南中

「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、東京高師卒業生は全国にサッカーを広めた

東京高師の卒業生は、現場の教師として赴任した学校でサッカーを指導しました。また、校長先生として赴任した学校でサッカーを奨励することもありました。湘南高校の赤木愛太郎、五中・小石川の伊藤長七、志太中、いまの藤枝東の錦織兵三郎らがそうです。

成田十次郎先生の義父である成田千里は覚之助の後輩です。第一東京市立中学、いまの九段高校の初代校長、そして豊島師範学校長を務めました。先ほどのライオン像も、成田千里の遺品の中にあったものだそうです。

刈谷中も湘南中も、モデルは英国のパブリックスクールです。スポーツ、とりわけフットボールの教育的意義を認め、ベースボールよりもフットボールを奨励した学校づくりが進められました。

■ 参加者からのコメント

中塚：ここでいったん切って、補足とかご質問を受け付けたいと思います。ここから先は高等師範の話から高師附属中の話に入っていくので。

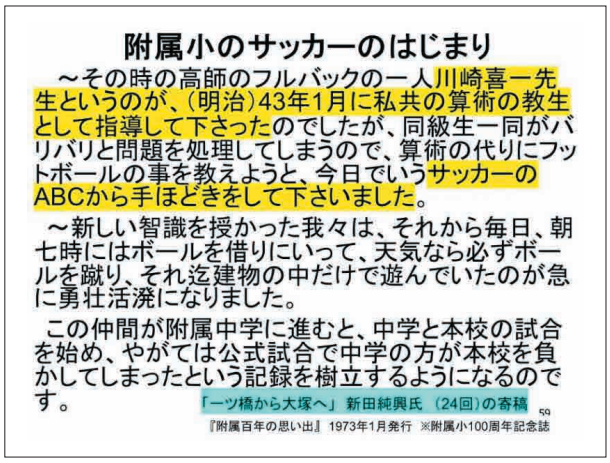
小堀：熊野にも臼杵にもご一緒させてもらいました。三本足烏と日名子実三さんのことには非常に興味を持ちました。それと、先ほどの画像の中にライオン像があったと思いますけど、あれも日向子実三がオリンピックを考えて、フランスに留学したときに、ヨーロッパ中の各地の戦争遺跡を訪問しているのでその一つだと思います。ライオン像の影響の指摘は非常に貴重だと思います。

臼杵に行ったときの熊野神社の絵馬にカラスが飛んでいるのも、日名子のデザインのアイデアのもとになったのではないかなという感じを強く持ちました。

中塚：ありがとうございます。ではここからもう一つのルーツ校、東京高師附属中学周辺のできごとを追いながら、大戦前の日本サッカーの後半戦をみていきたいと思います。

大戦前の日本サッカー：二つのルーツ校を中心に　②東京高等師範学校附属中学校

■ 附属小学校のサッカーの始まり



附属小のサッカーのはじまり

～その時の高師のフルバックの一人川崎喜一先生というのが、(明治)43年1月に私共の算術の教生として指導して下さったのでしたが、同級生一同がバリバリと問題を処理してしまうので、算術の代りにフットボールの事を教えようと、今日でいうサッカーのABCから手ほどきをして下さいました。

～新しい智識を授かった我々は、それから毎日、朝七時にはボールを借りにいって、天気なら必ずボールを蹴り、それ迄建物の中だけで遊んでいたのが急に勇壮活溌になりました。

この仲間が附属中学に進むと、中学と本校の試合を始め、やがては公式試合で中学の方が本校を負かしてしまったという記録を樹立するようになるのです。

「一ツ橋から大塚へ」 新田純興氏 (24回)の寄稿

『附属百年の思い出』 1973年1月発行 ※附属小100周年記念誌

『附属 100 年の思い出』という東京教育大学附属小学校 100 周年記念誌に、とても興味深い記事が載っていました。先ほどから何度も出てきている新田純興が書いたものです。新田さんは附属小から附属中へ。戦前だから 5 年間過ごし、そこから一高、東京帝大へ進むのですが、この人の小学校のときの思い出です。

「～その時の高師のフルバック」とはどういうことかと言うと、負け続けていた YC&AC に 1908 年に初勝利し、都内の新聞でそのことが大きく取り上げられたことがあったようで、その試合のことを指しています。

そのメンバーの一人である川崎喜一先生が、「明治 43 年 1 月に私どもの算術の教生として指導してくださったのでしたが、同級生一同がバリバリと問題を処理してしまう」というのはさすが附属小の子どもたちですね。「算術の代わりにフットボールのことを教えようと、サッカーの ABC から手ほどきをしてくださいました」と。これが附属小におけるサッカーの始まりだということです。

「新しい知識を授かった我々は、それから毎日朝 7 時にはボールを借りに行って」というのは、高等師範のサッカー部の寮が附属小の近くにあったので、そこに借りに行ったということですね。「天気なら必ずボールを蹴り、それまで建物名の中だけで遊んでいたのが急に勇壮活発になりました」ということです。この仲間が附属中学に進む。つまり小学校のときからボールを蹴っていた子が附属中に入ってサッカーを続けると、それは上手になりますよね。「やがては公式試合で中学の方が本校を負かしてしまったという記録を樹立する」。つまり附属中対高等師範が公式試合で対戦し、附属中が勝つということが本当に起きるわけです。これについては後述します。

■ 附属中学校のサッカーの始まり

『附属中学サッカーのあゆみ』という本に、やはり新田純興が、今度は附属中学でのサッカーの始まりのころのことを書いています。

先ほども言いましたが、嘉納治五郎は留学生を多数受け入れていました。そして留学生のスポーツ活動も奨励していました。「グラウンドでプレーするのを若い附属の連中が真似し新しい技術を身につけるように」なります。小学校からやっていたことに加え、留

学生からも学んでいたようです。これが茗荷谷駅前、いまの文京スポーツセンターの辺りの話です。東京高師と附属中は同じグラウンドを使っていました。

附属サッカーの誕生

～高等師範に入学してきた中華民国、韓国、台湾出身の留学生がグラウンドでプレーするのを、若い附属の連中が真似し新しい技術を身につけるようになり、大正6(1917)年、内野台嶺先生が附属の先生に戻られ附属中学のア式蹴球の指導をして下さった。

この年、芝浦の埋立地で日本代表としてサッカーに出場したが、中国、比国に大敗した。これが転機となりクラブ組織のサッカーチームをつくることになり、高等師範、青山師範、豊島師範の卒業生で東京蹴球団が作られ、サッカーの指導や宣伝試合を行った。

大正7(1918)年には関東蹴球大会を開き、一般組と中等学校と二種類に分けて試合が行われた。

「附属サッカーの誕生」 新田純興氏 (24回)の寄稿

60

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

そして豊島師範に着任した内野台嶺先生が高師と附属の漢文教師として戻って来ます。高師蹴球部長でかつ附属中学の漢文の先生です。「附属中学のア式蹴球の指導をしてくださった」と書かれています。サッカーのことですね。

「この年、芝浦の埋立地で日本代表としてサッカーに出場したが、中国、比国に大敗した」というのは前述の 1916 年の極東選手権の話です。「これが転機となりクラブ組織のサッカーチームをつくることになった」というのは、内野台嶺が立ち上げた東京蹴球団のことです。そして関東蹴球大会がはじまり、同時期に東海、関西でも蹴球大会が開かれたという話に続きます。

関東蹴球大会

第1回	1918(大正7)年2月	豊島師範A2-0豊島師範B
第2回	1919(大正8)年2月	青山師範2-0佐倉中
第3回	1920(大正9)年2月	豊島師範2-0佐倉中
第4回	1921(大正10)年2月	豊島師範6-1埼玉師範
第5回	1922(大正11)年2月	青山師範2-1豊島師範
第6回	1923(大正12)年2月	青山師範2-0青山師範
第7回	1924(大正13)年2月	豊島師範2-1青山師範
第8回	1925(大正14)年2月	青山師範1-0豊島師範
第9回	1926(大正15)年1-2月	青山師範2-0成城中
第10回	1928(昭和3)年2月	青山師範2-0東京府立五中
第11回	1929(昭和4)年1-2月	青山師範2-0茨城師範
第12回	1930(昭和5)年1-2月	東京府立五中4-1埼玉師範
第13回	1931(昭和6)年1-2月	埼玉師範6-1青山学院中
第14回	1932(昭和7)年1月	青山師範2-1東京府立五中
第15回	1933(昭和8)年1月	青山師範4-0茨城師範

この大会に高師附中は初出場。桐陰会の部として公認される前のことであった

61

関東蹴球大会はやはり師範学校が強いんです。旧制中学校よりも 2 歳ぐらい年上です。体格に優る師範学校が優勝することが多いのですが、この第 3 回大会に附属中が初出場します。部として公認される前のこと、つまりモグリですね。

『附属中学サッカーのあゆみ』から、30 回生の岡山俊雄が書いた記事を紹介します。大正期の附属中の校庭の様子です。「私の在学中、昼休みに最も広く行われていた遊びはゴムまりのベースボールマッチ」です。実は野球も、附属ではいち早く取り入れられていました。ベースボールはいまの東大で始まったと言えるので、附属にもすぐ伝わってくるのです。フットボールは「ボールを軽く投げ上げ、落ちてくるところを高く蹴り上げるという遊び方、ボールが 1 個しかなかったから下級生はその仲間に加わりにくかった」というのはわかる気がします。中 1 から中 5 までがグラウンドにいるのですからね。

大正期の附属中の校庭のようす①

大正5年から10年(1916～21)へかけての私の在学中、昼休みにもっとも広く行われていた遊びは、ゴムまりのベースボールマッチ(中略)

遊び道具としてのフットボールは、(中略)ボールを軽く投げ上げ、落ちてくるところを高く蹴り上げるという遊び方、ボールが1個しかなかったから下級生はその仲間に加わりにくかった。

それがいつの頃からか、生徒が思い思いに相手を見つけてジャンケンをし、負けた方が帽子をうしろ前にして敵味方に分かれ、ベースボールをやっている間を縫いつつ、相手側のゴールを狙うという、不特定多数による試合形式の遊びが、ベースボールに匹敵するくらい盛んになった。

「蹴球部の紀元前の話」 岡山俊雄氏(30回)の寄稿

62

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

「それがいつの頃からか、生徒が思い思いに相手を見つけてジャンケンをし、負けた方が帽子をうしろ前にして敵味方に分かれ、ベースボールをやっている間を縫いつつ、相手側のゴールを狙うという、不特定多数による試合形式の遊びが、ベースボールに匹敵するぐらい盛んになった」ということです。

大正期の附属中の校庭のようす②

全生徒の推定70%が全面に散らばっているというグラウンドコンディションでは、ショートパスをつないで、相手方のゴールに迫る以外に手はない。毎日そういう遊びをやっていれば、誰にも教えられずに、ショートパスの要領を自得する。附属のものならほとんど誰でも、ある程度以上にボールに対するなじみの深さ、ないし、なれのレベルの全般的な高さは、この遊びに由来するといえると思う。

(中略)特にフットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた。

「蹴球部の紀元前の話」 岡山俊雄氏(30回)の寄稿

63

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

「全生徒の推定 70% が全面に散らばっている」。みんな男子です。「ショートパスをつないで相手方のゴールに迫る」以外にやりようがないですよね。大勢がいて、ベースボールもやっている間なのですから。それ

はもうぐちゃぐちゃです。「誰にも教えられずにショートパスの要領を自得する。附属のものならほとんど誰でも、ある程度以上にボールに対するなじみの深さ、ないし慣れのレベルの全般的な高さは、この遊びに由来すると言える」というのはその通りだと思います。

大正期の附属中の校庭のようす③

大正9(1920)年2月の第3回大会に出場したチームは、上記の「御常連」と昼休みの不特定多数による試合式遊びで目立ったものの中から選抜された5年(29回)・4年(30回)生を主力とするものだった。

出場に先立ち、内野台嶺先生(後の協会初代理事)から、試合に臨む注意ないし心がけについて話があった。といっても、センターハーフは誰かと尋ねられ、ハイと私が手を挙げると、重要なポジションだからがんばってやるように、という程度のお話だった。

まだ部として存在していたわけではないからユニフォームもなく、野球部のを借用(白の半そでで、その袖に黒ラシャのF字のマークつき)した。

「蹴球部の紀元前の話」 岡山俊雄氏(30回)の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

II 記録の部

『附属中学サッカーのあゆみ』 1984年5月発行

1．大正七年

◎ 第一回関東蹴球大会

期　日　大正7年2月9, 10,11日

名誉会長　嘉納治五郎

（東京高師校長, 日本体育協会長）

会　長　永井　通明

（東京高師教授, 東京蹴球団長）

会　場　東京高師校庭

主　催　東京蹴球団

後　援　朝日新聞社

以上の様な形で催され中等学校8チームと一般模範試合とで行われた。

戦　況

豊師A 2 — 0 豊師B

豊師A → 豊師A 5 — 0 明治学院中

豊師A → 横浜一中 1 — 0 佐倉中

豊師B → 豊師B 2 — 0 青師B

豊師B → 埼玉師 1 — 0 青師A

附中は参加していない。

2．大正八年

◎ 第二回関東蹴球大会

期　日　大正8年2月8, 9, 11日

会　場　東京高師校庭

戦　況

青師 2 — 0 佐中

青師 → 青師 3 — 0 豊師

豊師 → 豊師（不戦）

青師 → 成城 0 — 1 佐中

成城 → 成城 5 — 0 独協

佐中 → 横浜二中 1 — 2 佐倉中

附中は参加していない。

3．大正

◎ 第三回

期

会

戦　況

2 豊師 — 0 佐

附属中学

GK

斉

藤

戦記

(1) 附属3

附属のキック

附属よく走り

入れ、元気な

ックを余儀な

ハーフタイム

奮闘したるも

に三対零にて

(2) 青師2

の選手、青師

く守り観衆の

を得れば青師

らず。此時附

獲し前半戦を

除し附属の

る。屋後両軍得点なく規定によりて青師の勝となる。

即ち青師隔戦8附属3なり。(大9. 2. 9付 朝日新聞)

サッカー部のこと

二十九回　井染道夫

桐陰のサッカー部も輝く歴史を三十七年持っている。私が中学三年生の頃、東京蹴球団主催の関東中等学校蹴球大会が高師校庭で一月から二月十一日決勝というスケジュールで開かれた。当時附属には蹴球部はなかったし、是非作りたいと宮下丑太郎先生に相談したり御願いしたりしたがどうしても許可されずに年は経って行った。そして私が五年生の時漸く願がかなって、大正九年一月第三回関東中等学校蹴球大会に初の参加が許可された。主力は五年生であった。当時は豊島師範、青山師範が中等学校の双璧であり、高師ですら彼等には対等であった。もちろんこの二校は相互に優勝しているし参加をしていた。暁星、成城、豊山、青学、独協、目白の中学校も加わって、附属は第一回戦に豊島師範と闘った。当時の豊島は守屋星野など一流選手を持っていただけに附属の勝利などだれが予想しただろうか。愈々開戦となると、さすがは豊島だ、よく球を出して両翼から攻めて来る。CH守屋の長身を利しての攻防は大会随一の評であっ

東京教育大学附属中学校・高等学校『創立七十周年』1959年3月18日発行　p.70

部活になるよりずっと前の話です。そして「フットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた」というのが約100年前の話です。

先ほどの第3回関東蹴球大会に出場したチームは、部として公認される前ですが、「上記のご常連と昼休みの不特定多数による試合式遊びで目立ったものの中から選抜された5年・4年生を主力とするものだった」ということです。

出場に先立ち、内野先生が登場します。「試合に臨む注意ないし心がけについて話があった。といっても、センターハーフは誰かと尋ねられ、はいと私が手を挙げると、重要なポジションだから頑張ってやるようにという程度のお話しだった」とのこと。部として成立する前ですからユニフォームもなく、野球部のものを借用したそうです。

サッカー部の創部については、29回生の井染道雄が別のところに詳しく書かれています。この方は明治大学のサッカー部の創始者です。

「当時附属には蹴球部はなかったし、是非作りたいと宮下丑太郎先生に相談したりお願いしたりしたがどうしても許可されずに年は経って行った。そして私が5年生の時、ようやく願いが叶って、大正9年1月、第3回関東中学校蹴球大会に初の参加が許可された。主力は5年生であった」と書かれており、先ほどの岡山さんの話につながってくるわけです。

嘉納治五郎は、すでにあった校友会を改組再編して桐陰会とし、自ら会長となって全人教育を進めます。組織変遷図をみるとおもしろいのですが、蹴球部は陸上運動部から独立しています。陸上で行われる運動が陸上運動部にまとめられていたのですね。さらにその前をみると、遊戯部に行き着きます。はじめは文字通り「遊び」だったことがわかります。陸上運動部からの独立を創部とし、そこから100年目の今年2月に創部100周年の行事を行いました。

ちなみに、蹴球部から籠球（バスケットボール）部が分かれて誕生しているのも面白いですね。

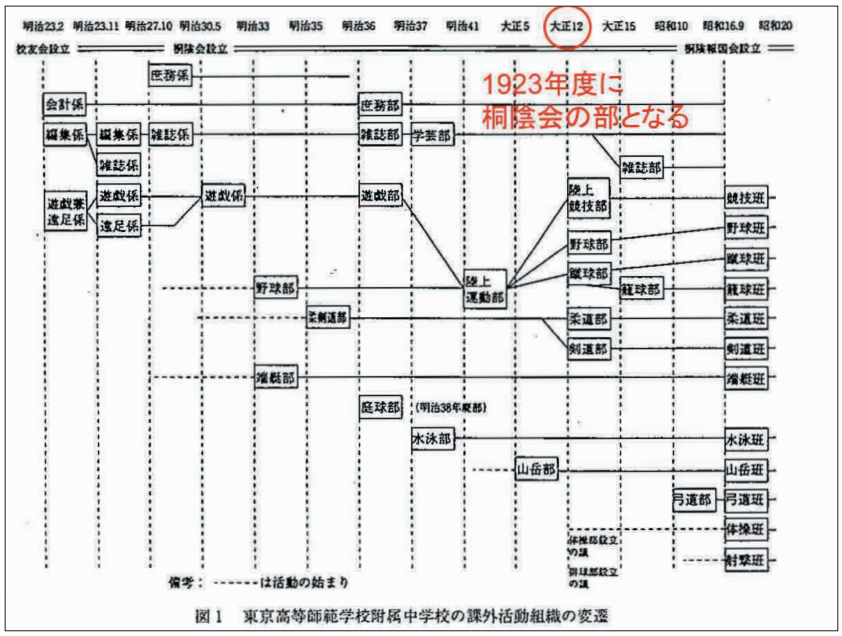


図1　東京高等師範学校附属中学校の課外活動組織の変遷

チョウディンとの出会い

日本にサッカーの技術を伝えたビルマ人、チョウディンは、日本サッカー殿堂に掲額されています。いまの話があった 1920 年頃に来日されたようです。東京工業大学、このころは蔵前工業ですが、その留学生です。東南アジアの人たちも、いち早く近代化を成し遂げた日本で勉強し、自分の国へ戻って貢献したい気持ちが強かったのでしょう。また、日本でしっかり学ぶとともに、自分の国でやっていたことも続けたかったでしょう。この人は走り高跳びとフットボールが得意でした。

チョウディンと附属中については、春山泰雄、東京帝大の黄金期のメンバーで日本代表にもなった方ですが、その方が『附属中学サッカーのあゆみ』に詳しく書かれています。「彼が高師グラウンドに現れ、近代サッカーの手ほどきをしてくれた」のが 1922 年秋ごろで、「彼と私達の縁結びの神様」は「30 回卒の鈴木重義氏」だと書かれています。早稲田サッカーの創始者ですね。

チョー・ディンと附属中①

彼は東京高等工業学校（蔵前→東京工業大学）への留学生として大正11（1922）年に来日している。彼が高師グランドに現われ、近代サッカーの手ほどきをしたのは同年秋ごろだったと思う。

彼と私達との縁結びの神様は、今は故人の30回卒の鈴木重義氏のような気がする。チョー・ディン氏はハイジャンプも得意としており、何かの縁で来日早々、早大グラウンドでジャンプ練習に行ったとき、早稲田高等学院のサッカーの練習を見て、コーチ役を名乗り出たが、これを大歓迎したのが、当時同学院の主将鈴木重義氏である。コーチのご利益あらたかに、同学院はインターハイで大正12年、13年と第1回、第2回に連覇している。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿

68

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

ハイジャンプを得意とする彼は、「何かの縁で来日早々、早大グラウンドでジャンプ練習に行ったとき、早稲田高等学院のサッカーの練習を見て、コーチ役を名乗り出たが、これを大歓迎したのが、当時同学院の主将鈴木重義氏」でした。その成果か、早稲田高等学院は旧制高校のインターハイで第 1 回、第 2 回に優勝しています。

その鈴木先輩が「後輩たちにご利益のお裾分けをしてやろうと、チョウディン氏を私達に紹介してくれた」のが春山さんの記録にあり、東京高師グラウンドに連れてきてくれたそうです。

別の記事にあったのですが、チョウディンはほかのビルマ人留学生数名と神楽坂のあたりに下宿しており、高師グラウンドのあたりは散歩の範囲なのか、たびたびやってきたようです。

チョー・ディンと附属中②

さすがは鈴木先輩である。後輩達にご利益のお裾分けをしてやろうと、チョー・ディン氏を私達に紹介してくれたのである。（中略）。

そんな彼が大正12（1923）年8月、蹴球の指導書（How To Play Association Football）を出版したのである。小生、34回の本田長康、真鍋良一両君も色々と協力し、タックルされたり、ドリブルで抜かれたり。主役は勿論チョー・ディン先生。こちらは生徒で、ああでもない、こうでもないと注文をつけられ、出来上がった写真の数々が同書の中に掲載されている。グラウンドは勿論東京高師である。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

そんな彼が「大正 12（1923）年 8 月、蹴球の指導書（How to Play Association Football）を出版」します。有名な本ですね。そしてこの本の中でモデルとして、33 回の春山さんとともに、34 回の本田長康、真鍋良一、いずれも後に日本代表になる人ですが、その方々が協力します。「タックルされたり、ドリブルで抜かれたり、主役はもちろんチョウディン先生。こちらは生徒で、ああでもない、こうでもないと注文を付けられ、出来上がった写真の数々が同書の中に掲載されている。グラウンドは勿論東京高師」でした。

チョー・ディンと附属中③

この本が出版された約1か月後が、あの9月1日の関東大震災である。始業式のあと蹴球気狂の小生、同級の児島英三君、四年の本田、真鍋の両君達と練習を楽しんでいる最中。午前11時58分。縦揺れと横揺れが噛み合う、まさに地軸をひっくり返す大地震。校舎の反対のゴールポストの裏にある二階建て図書館の屋根瓦が何百枚、何千枚と落ちるさまは恐怖の限りである。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿

71

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

チョー・ディンと附属中④

サッカー生活の方は中学の締めくくりで、大正13(1924)年1月、東京高師グラウンドで行われた第3回全日本選手権大会東部予選である。(中略)

1回戦で全高師を2対0で破ったのは全くの大金星。子供心に憧れていたお兄さんチームに勝ったのだから、喜びこの上なし。相手のCH竹内虎士氏は名に負う名選手。狙った獲物は外さないという男だが、こちらはチョー・ディン直伝の三角型パスがある。子供達にショートパスでちょこまかと動かれたのでは大の男達もやりにくかったであろう。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏(33回)の寄稿 72

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

この本が出版された約１ヶ月後の９月１日に関東大震災が発生します。９月１日は始業式ですね。そのあとおそらくホームルームがあって、先生方は会議です。サッカー好きの子どもたちはグラウンドでサッカーを楽しんでいるというのもありそうな話です。午前 11 時 58 分、まさに地軸をひっくり返す大地震が起きるわけです。

春山さんの中学サッカーの締めくくりは大震災翌年の１月、東京高師グラウンドで行われた第３回全日本選手権、いまの天皇杯の東部予選１回戦で、東京高師と附属中の試合です。これに附属中が 2-0 で勝利します。これが新田さんが言及されていた試合で、いまで言う筑波大学に筑波大附属高校が勝った話です。憧れのお兄さんたちに勝ったのだからうれしかったでしょうね。相手のセンターハーフ、竹内虎士は有名な方ですが、「こちらはチョウディン直伝の三角パスがある。子供達にショートパスでちょこまかと動かれたのでは大の男達もやりにくかったであろう」と書かれています。

蔵前工業は大震災で崩れ、授業はできなくなり、チョウディンの全国行脚が始まります。御影師範がチョウディンを神戸に呼んでサッカーを指導してもらいますが、その合間に宝塚で歌劇を楽しむチョウディンを待ち伏せていた神戸一中の人たちも、チョウディンから直々にサッカーを教わったということです。この話は、賀川浩さんが嬉しそうによく話してくださいました。

■ 1930 年の極東選手権制覇とエリート校中心のサッカー環境

日本サッカーのレベルは徐々に向上し、先ほども出てきた極東選手権優勝につながります。その背景にはチョウディンの指導の成果もあったことでしょう。

第９回極東選手権優勝メンバーを見てみると、監督の鈴木重義、フォワードの春山泰雄、ミッドフィルダーの本田長康、フルバックの近藤台五郎が附属中出身者として名を連ねています。附属中卒業後は、旧制高校を経て東京帝大や早稲田で活躍されています。このチームは東京帝大出身者が大半を占めています。東大黄金期を形づくった人たちです。出身中学は附属中や神戸一中、広島高師附属中など。府立五中からも２人、竹内悌三さんとゴールキーパーの阿部鵬二さんが入っています。

このようにサッカーは、いわゆるエリート校で行われていました。逆に言うと、エリート校以外にサッカーは広がっていなかったと言えるかもしれません。

第9回極東選手権優勝メンバー

ﾎﾟｼﾞｼｮﾝ	氏　名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場 フィリピン	試合出場 中華民国
監督	鈴木 重義	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	-	-
FW	春山 泰雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○	○
	若林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽	▽
	手島 志郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
	篠島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校尋常科	東京高校	東京帝国大	○	○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○	○
	市橋 時三	1909(明治42)年6月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△	△
HB	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽	○
	竹腰 重丸	1906(明治39)年2月15日	大連一中	山口高校	東京帝国大	○	○
	野沢 正雄		広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
FB	竹内 悌三	1908(明治42)年11月6日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○	○
	井出 多米夫	1908(明治42)年11月27日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△	
	後藤 靭雄		関西学院中		関西学院大	○	○
GK	斉藤 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○	○
sub							
HB	西村　清		神戸一中	松山高校	京都帝国大		
	大町　篤				東京帝国大		
FB	杉村 正二郎	1907(明治40)年8月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大		
	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大		
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大		
GK	阿部 鵬二	1909(明治42)年1月27日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	74	

注）試合出場欄は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場

高校サッカー年鑑には、全国大会出場校一覧が載っています。大戦前の選手権には、附属中が３回出ています。神奈川は山梨と予選をやっていましたが、湘南中が３回出ています。優勝校は、師範学校以外には神戸一中や広島一中、あとは朝鮮半島の学校です。

サッカーは高等師範の卒業生が赴任した学校で行われ、それ以外にはまだほとんど広がっていなかったことがうかがえます。

高師附属中の人たちも大戦前のサッカー環境に大きく貢献しています。卒業後、行った先々でサッカー部を作りまくっているのです。新田純興は東京

帝大で、のちの JFA 会長、野津謙とともにサッカー部を創ります。JFA 創設に尽力されたのは前述のとおりです。先ほども出てきた井染道夫は明治大で、鈴木重義は早稲田大で、峯岸正雄は立教大で、斎藤久敏は慶應義塾で。もちろん 1 人で作ったわけではありませんが、創始者のうちの 1 人となっています。日本代表として活躍した方も大勢いらっしゃいます。竹内至は旧制新潟高校でサッカー部を創り、京都帝大を経て東京ガスサッカー部を創ります。いまの FC 東京ですね。

市田左右一は蹴球部員ではありませんが、旧制広島高校から九州帝大を卒業し、日本で最初の FIFA 理事になった方です。島田秀夫は J リーグが始まった時の JFA 会長。諸橋晋六は、大漢和辞典を著された諸橋轍次のご子息です。

もう一つのルーツ校　東京高師附属中

氏　名	卒業年	卒業回	卒業後の動向
★今村 次吉	明治30(1897)	第6回	東京帝大。大日本蹴球協会初代会長
★新田 純興	大正4(1915)	第24回	旧制一高、東京帝大でサッカー部創設。大日本蹴球協会創設に尽力
井染 道夫	大正9（1920）	第29回	明治大でサッカー部創設
中島 道雄			旧制水戸高でサッカー部創設。のち東京帝大
★鈴木 重義	大正10(1921)	第30回	早稲田大でサッカー部創設。ベルリン五輪代表監督
峯岸 正雄			立教大でサッカー部創設
岸本 英夫			東京帝大ア式蹴球部で活躍
斉藤 久敏	大正11(1922)	第31回	慶應義塾でソッカー部創設
春山 泰雄	大正13(1924)	第33回	旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
本田 長康	大正14(1925)	第34回	早稲田大。日本代表として活躍
近藤 台五郎			旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
西川 潤之	大正15(1926)	第35回	法政大。日本代表として活躍
竹内 至			旧制新潟高でサッカー部創設。京都帝大卒業後、東京瓦斯サッカー部（現FC東京）創設
市田 左右一	昭和3(1928)	第37回	旧制広島高から九州帝大卒。1958～1962FIFA理事
★島田 秀夫	昭和8(1933)	第42回	東北帝大卒。日本サッカー協会第7代会長
★諸橋 晋六	昭和15(1940)	第49回	上智大卒。元三菱商事会長。2002年招致委員会副会長。「三菱ｸﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞｻｯｶｰ」を紹介。

★は日本サッカー殿堂掲額者

1929 年の JFA 役員改選－師範学校系から大学系へ

大戦前の日本サッカー界でもう一つ押さえておきたいのが、大日本蹴球協会の役員の話です。

附属中の日本サッカーへの貢献
大日本蹴球協会役員の変遷①

1921年12月現在
会長：○今村治吉
理事：近藤茂吉
●内野台嶺
●熊坂圭三
吉川準治郎
●永井道明
武井群嗣
高橋禮本

1929年4月現在
会　長　：○今村治吉
常務理事：○鈴木重義（早大）
理　事：吉川準治郎　野津　謙（帝大）
山田午郎　千野正人（慶大）
○井染道夫（明大）　○中島道雄（帝大）
○峯岸春雄（帝大）　竹腰重丸（帝大）
浦下正二　千葉幸雄
瀬谷　薫　下出重喜
神田清雄　直木三郎
栗本義彦　諸岡源吉

組織が大幅に変わったのは1929年の改選からだ。日本サッカーはそれまで高等師範や師範学校の関係者がけん引していた。1929年5月にFIFAに正式加盟し、日本サッカーを国際化するには大学の関係者が中枢を担い、全国の支部をまとめていく必要があると考える者たちがいた。　『日本サッカー協会百年史』

JFA 創設時の役員は 1921 年 12 月現在の方々です。黒丸をつけたのが東京高師の卒業生または関係者です。内野台嶺、熊坂圭三は高師蹴球部 OB です。永井道明も卒業生ですが、蹴球部 OB はありません。「いだてん」にも出てきた体操の先生です。こういった人たちが創設時の役員でした。

会長として担ぎ出されたのが今村次吉で、陸上競技連盟の会長をされていました。附属中の 6 回卒です。附属中卒業生には○をつけました。

JFA の役員は師範学校系で構成されていましたが、1929 年に大きく変わります。牛木素吉郎さんはよく「1929 年の政変」「クーデター」と言われていました。JFA100 周年記念として昨年発刊された『日本サッカー協会百年史』には次のように書かれています。

附属中の日本サッカーへの貢献
大日本蹴球協会役員の変遷②

1931年2月現在
会長：○今村治吉
理事：吉川準治郎
野津　謙（広島一中→帝大）
千野正人（神戸一中→慶大）
○中島道雄（附属中→帝大）
○鈴木重義（附属中→早大）

1933年4月現在
会長：欠
顧問：○今村治吉
理事：○鈴木重義（附属中→早大）
吉川準治郎
竹腰重丸（大連一中→帝大）
島田晋（慶大）

1936年4月現在
会長：深尾隆太郎
理事：○鈴木重義
吉川準治郎
野村正二郎
山田午郎
○新田純興
野津　謙
●佐々木等
濱田諭吉
竹腰重丸
○中島道雄
市橋時蔵

「組織が大幅に変わったのは 1929 年の改選からだ。日本サッカーはそれまで高等師範や師範学校の関係者がけん引していた。1929 年 5 月に FIFA に正式加盟し、日本サッカーを国際化するには大学の関係者が中枢を担い、全国の支部をまとめていく必要があると考える者たちがいた」。

そう考えたのは、表の中で白丸がついている、附属中の卒業生です。井染さん、峯岸さん、中島道雄さん、鈴木重義さん。各大学にサッカー部を創り、関東でリーグ戦をはじめ、そこが日本サッカーの中心となっていく時代です。JFA の担い手は、師範学校系から大学リーグの人たち、すなわち附属の卒業生に委ねられるようになりました。浦下さん、千葉さん以下の 8 名は各地域から選出された方なので別枠となります。東京帝大の竹腰重丸もいます。附属中の臨時コーチを務めてくれたこともありました。野津謙の名前もあります。朝日新聞の山田午郎はサッカー記者の草分けですね。

1931 年 2 月。このメンバーのときに JFA のシンボルマークが決まるのですが、附属の卒業生が多くを占めています。今村次吉が会長を退いて顧問となり、会長不在の時期があったようですが、そのときも鈴木重義は残っています。

1936 年 4 月。夏にベルリンオリンピックがある年ですが、そのときの協会役員には新田純興の名前が見られます。この方は東京帝大を卒業してから三菱鉱業に入社して佐渡鉱山に赴任したため JFA の運営から離れていましたが、1935 年に東京に戻って来て JFA の理事になりました。ベルリンオリンピックへの選手派遣費募金活動に、関西の田辺五兵衛とともに尽力されました。

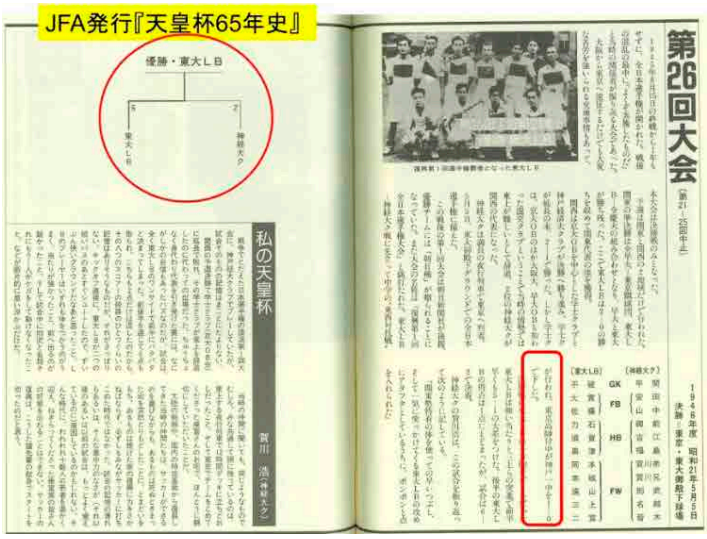
大戦前、日本サッカーは初めてオリンピックに出場します。1936 年のベルリン大会です。主将の竹内悌三さんは府立五中、小石川の OB です。2016 年に「日本サッカーのルーツを語ろう」というシンポジウムをしたときに、懇親会から竹内悌三さんのご長男が参加されました。竹内宣之さん（68 回卒）です。そのとき語ってくださったことを、報告書に寄稿されました。「父（竹内悌三）の遺言－二人の息子には附属でサッカーをさせる」です。竹内悌三さんは戦後、シベリアに抑留され、そこで亡くなられますが、2 人の息子はともに附属でサッカーをしました。ちなみに竹内悌三さんの長女は、世界的な照明デザイナーの石井幹子さんです。

もう一つ、これまたすごい話です。後藤岩男さんの関東フットボール協会の 1938 年のアドミッションが私の手許にあります。ご子息の後藤邦夫さん（71 回卒）から預かったものです。後藤岩男さんは東京高師蹴球部長を長く務めた戦前最後の部長です。邦夫さんは附属サッカー部 OB で、附属大塚特別支援学校に務めておられたころからずいぶんお世話になりました。筑波大学に出られた後は、女子サッカー部の部長もされました。「日本サッカーのルーツを語ろう」の報告書には、後藤邦夫さんの寄稿「わが青春のサッカー記－父（後藤岩男）のあとを追って」があります。

ついでながら、戦後最初の阿部三亥部長のご子息は阿部生雄さん（72 回卒）です。附属中学校長や附属学校教育長を務めたスポーツ史の大家です。公私にわたってすごくお世話になりました。亡くなられたのが残念です。

附属はいろんなスポーツが盛んなところですが、とりわけサッカー絡みの人脈がすごく、いろんなところでつながっています。あの人も附属、この人も附属という感じです。

■ 1946 年の全国制覇



JFA 発行の『天皇杯 65 年史』の第 26 回大会のページには、終戦翌年の 1946 年 5 月 5 日、東大御殿下グラウンドで全日本選手権決勝があり、東大 LB が神戸経済大学クラブに 6-2 で勝って優勝したことが書かれています。左下には賀川浩さんの「私の天皇杯」というコラムがあります。賀川さんはこの試合に神戸経済大学クラブの選手として出場されています。戦争から復員されたがすることもなく、そのうち仲間から、サッカーやるから東京へ行くぞと声がかかり参加したのがこの試合。しかし長時間汽車に揺られ、東京では「よう来たな」ともてなしを受け、サッカーどころじゃなかったという話を、2016 年の「日本サッカーのルーツを語ろう」でお聞きしました。

桐

第三號

全國制覇成る

桐陰史中最大の勝利!!

その試合の前座として中学校の東西対抗戦があり、東日本代表の東京高師附属中が神戸一中を 1-0 で下したことが記されています。全国優勝ですね。

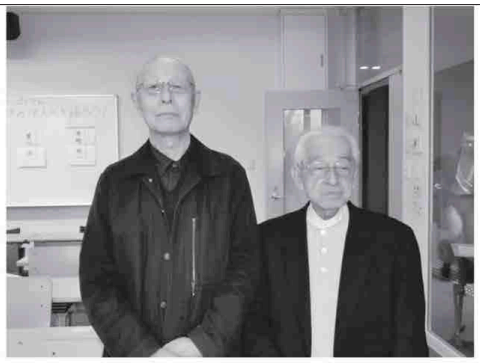
このことが、当時の校内新聞に紹介されています。「全国制覇成る　桐陰史中最大の勝利！」

見る人が見ればわかるのですが、メンバーの中に陸上部の主将がいます。野球部もこの夏、選手権に出場していますが、その中心選手もいます。サッカーもやれば野球もやる。いろんなスポーツをやっていたのですね。

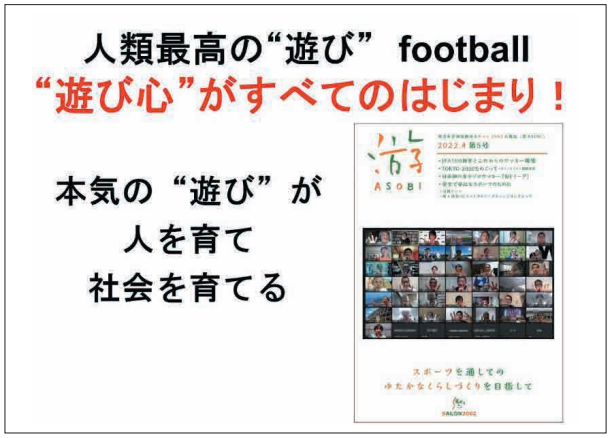
甲子園球場は米軍に接収されていたので西宮球場でしたが、優勝した浪商高校に敗れます。負けた附属中の選手は土を持ち帰ります。それが甲子園の土を持ち帰る習慣になっていったということです。

この写真は 2014 年 3 月、サロン 2002 公開シンポジウム「スポーツクラブの法人化を語ろう」の際に撮影したものです。賀川浩さんに話をしてもらいましたが、会場には附属 OB の小栗純二さん（53 回卒）もいらしゃいました。実はこの方、1946 年の優勝チームの監督なんです。そのことを初めて知ったのは、蹴球部の OB 会か、何かの研究会で、会場に小栗さんがおられる場でした。戦後すぐに附属中が全国優勝したという話を私がしたところ、小栗さんご自身から「そのときの監督は僕だよ」と言われ驚いたことがあります。学生監督ですね。小栗さんも鬼籍に入られました。

“遊び心”がすべてのはじまりです。附属サッカーのあゆみをみていると、そのことがよくわかります。最初から部活があったわけではありません。やりたい遊びがあって、やりたい人が、やりたいときにやり、本気で遊んでいたから、人が育ち、社会が育つのだということをすごく感じます。



小栗純二さん（左）と賀川浩さん（右）
サロン2002公開シンポジウム
「スポーツクラブの法人化」を語ろう！
2014年3月30日　筑波大学東京キャンパス



■ 参加者からのコメント

中塚：ここまでで補足やご質問があればお願いします。せっかくなので、遅れて会場に来られた小針さん。いま附属中の保健体育の教師をされていますが、自己紹介を兼ねてここまでの感想をひと言お願いします。その次に附属 OB の大河原さん、お願いします。

小針：附属中学校保健体育科の小針昇平と申します。私はちょうどヤタガラスのあたりから参加させていただきましたが、ヤタガラスのルーツが諸説ある中で、ライオン像がヒントになったのではないかというこ

と、またそもそも文献にある八咫烏ではないかということが印象に残りました。内野台嶺先生の漢文の授業で、もしかすると附属の生徒が八咫烏がいいのではないでしょうかと言ったのではという話を中塚先生がされていましたが、私もその説が有力な気がします。

いままで何の疑問を感じずに、そういうものなんだなと思っていたところにも、歴史をたどれば語源というか、ルーツがわかり、附属高校が深く関わっていることや、附属高校出身者がサッカー界の重鎮に大勢いらっしゃるというのが、すごい伝統と文化のある学校なのだなと改めて思いました。以前は東大に 100 人以上進学していた歴史もある中で、サッカーはもちろん、各界につながっている附属のネットワークを、自分としても少しでも伝えられるようにしていこうと思いました。

サッカーのことを深く知ることができて大変勉強になり、興味・関心が湧きました。自分でも文献からひもといて何か見ていきたいなと思いました。

大河原：遅れて参加しています。サロン 2002 ファミリーで、所属団体としては桐窓サッカー倶楽部となります。出身はこの附属中高サッカー部で 106 回卒業生です。

先ほど話のあった 2016 年のシンポジウムなど、私も歴史のいろんな話をお聞きしてきましたが、頭の中で整理し切れていない部分がまだあります。今日の話をお聞きしても、前後関係がわからなくなるところがまだあるような状態なので、これからも参加して頭の中を整理していきたいと思います。

附属のサッカー部が先ほど、創部前から公式戦に出ていた話がありました。創部からちょうど 100 周年を迎え、いろんなイベントをやりました。イベントはやりましたが、記念誌がまだ準備すらはじまっていません。中塚先生がまとめてくださっている資料や、卒業生から集める写真などを盛り込んでつくっていければなと思っています。

新しい話を少し交えると、先ほどの全国優勝したチームに陸上部の主将や野球部のエースがいたという話がありました。つい先日、附属高校フットサル部が、東京都の高校生大会で初優勝しました。F リーグの下部組織などが出場しない、高校フットサル部だけの大会ですが、優勝できたのはうれしいことです。そのチームにも、野球部の主将やバレーボール部の主将がいます。これはある意味、附属の文化なのかもしれません。一つの部だけでなくていろんなことをやる。そういうムードがあるのかなと、先ほどお聞きしていて思いました。

中塚：ありがとうございます。他の方からもコメントがあればいかがでしょうか。佐藤さんが試みておられますが、声が出せないようです。しかし画面には何か出てきています。「『ア式蹴球』鈴木重義、野津謙著」。すごいなこれ。何が書いてあるんだろう。定価 1 円ですか。すごいなその本は。初めて見ます。ありがとうございます。

では後半の終盤ということになりますが続けさせてください。残り 20 分です。あと 10 分ぐらいで私の話は終わりにしたいと思います。

今後に向けて

■ シンポジウム「サッカー×アート」

コロナ禍でいろんな活動が停滞しましたが、それでも動きはありました。

2020年1月26日、本校敷地内の桐陰会館で「サッカー×アート」という、刺激的なシンポジウムが開かれました。

このころはダイヤモンド・プリンセス号の一件が始まったころでしょうか。1 ヶ月後には当時の安倍晋三首相が、全国の学校の一斉休校を宣言し、大変なことになっていく時期です。

JFA のシンボルマークの由来や背景をひもとくシンポジウムで、キーパーソンは内野台嶺と日名子実三、

そして中村覚之助です。東京高師を受け継ぐ筑波大学と、日名子実三の出身校の東京美術学校、いまは東京芸術大学美術学部ですが、両校のコラボで企画されました。筑波大学芸術学群長の太田圭さんは蹴球部の副部長です。東京芸大美術学部長の日比野克彦さんはいま学長をされています。このお二人は、東京芸大サッカー部の先輩後輩です。そのような関係で、このシンポジウムが企画されました。日本サッカーのはじまりと東京高師のかかわりについては、OB として現役部員に何度か話したことがあり、太田副部長からはこのシンポジウムについて早くから相談がありました。私も話をさせてもらいました。

中村覚之助の話を公に取り上げたのは 2009 年 3 月 21 日に那智勝浦町で開かれた「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」というシンポジウムが最初です。2010 年 2 月 6 日には東京で「熊野の中村覚之助」というシンポジウムを開き、これらを報告書にまとめました。

その 10 年後に日本ヤタガラス協会が発足し、5 月 18 日に設立総会があり、記念講演をさせていただきました。コロナ後は毎年、那智勝浦町に出向いております。

2019年5月18日　日本ヤタガラス協会設立記念講演
「ヤタガラスに託す思い－日本サッカーのあゆみとともに」

「サッカー×アート」のシンポジウムでの私のテーマは「内野台嶺と中村覚之助」です。今日のような話をさせていただきました。会場には成田十次郎先生が来られました。最後にお会いする機会となってしまいました。成田先生からライオン像の話が紹介されたのはこのときです。

成田先生の隣には那智勝浦から来られた中村統太郎さん、逆隣には真田久さんがいらっしゃいます。日比野克彦さんや、筑波大学長の永田恭介さんもいらっしゃいます。私もちょこんと座っています。

永田学長のご挨拶に始まり、太田さん、日比野さん、真田さんのトークショーもありました。内野台嶺さんは漢文学の大家であり、その方面からの報告もありました。日名子実三さんについての考察もたいへん興味深いものでした。この内容をまとめて出版する話が進み、原稿も提出したのですが、コロナの影響かいろんなことがストップして立ち消えになっています。

那智勝浦町からは堀順一郎町長も来られました。町を挙げて力を注いでくれています。

2020年1月26日　桐陰会館＝筑波大学附属中高敷地内

■ 八咫烏シンポジウム

紀の国わかやま文化祭2021
八咫烏シンポジウム
日本サッカーの始まりと中村覚之助
－JFA100周年にあたって－

2021（令和3）年11月3日（水祝）　15:20～16:20
那智勝浦町体育文化会館

中塚義実

- 筑波大学附属高等学校
  保健体育科教諭・蹴球部顧問（1987～）
- 特定非営利活動法人サロン2002
  理事長（～1997～／2014～）
- 日本ヤタガラス協会　副会長（2019～）
- 筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ
  元理事長（2008～2018）

コロナど真ん中の 2021 年に「紀の国わかやま文化祭 2021」がありました。国民文化祭です。各自治体でイベントが企画され、那智勝浦町では「八咫烏シン

ポジウム」が 11 月 3 日に開かれました。那智勝浦町では堀町長が張り切っています。私にとってはコロナになって初めての旅行でした。

「日本サッカーの始まりと中村覚之助」というテーマで話をさせてもらいました。地元の偉人のことを、地元の方は意外とご存知ありません。

シンポジウムではほかに、日本ヤタガラス協会会長の山本殖生さんによる「熊野の八咫烏伝承の魅力」と、「熊野三山参詣曼荼羅絵解き」の協演がありました。いずれもすごく興味深い内容でした。参加者も多く、盛り上がりました。

シンポジウム後に、中村覚之助の名誉町民顕彰式がありました。統太郎さんが、町長から記念の盾をいただいているところです。

改めて思いましたが、JFA のシンボルマークと関係あるかどうかはともかく、日本にサッカーの種をまいた

“始祖”として、中村覚之助のことをもっともっとクローズアップしていきたいと思います。成田先生をサッカー殿堂に推薦させてもらいましたが、覚之助のサッカー殿堂入りへ向けても、これからも引き続き活動を続けていきたいと思います。

■ 日本ヤタガラス協会の動向

コロナが 5 類に移行し、ひとの行き来が元に戻って来ました。2019 年に設立された日本ヤタガラス協会は、総会以降、コロナでほぼ休業状態でしたが、2023 年度より徐々に再開しています。

2023 年 7 月 14 日、熊野那智大社例大祭「扇祭」をみてきました。「那智の火祭り」として有名ですね。毎年 7 月 14 日に開かれます。

その翌日、久しぶりに日本ヤタガラス協会の年次総会と付帯イベントがありました。ヤタガラスを使った地元の商品を紹介しあう会でした。いろんな商品があります。グッズ紹介を通して互いの交流も生まれました。昨年度の公開シンポジウム「成田十次郎先生を語ろう」の懇親会で提供した日本酒は、このとき知り合った「九重雑賀」から取り寄せたものです。

実は今日、山本会長と電話で話して、今年も 7 月 14 日の扇祭りに合わせて総会をすることになりました。

2023年7月14日　熊野那智大社「扇祭り」

翌 15 日が総会です。ちょうど休日なので都合がいいですね。

そして今年は 7 月 13 日の土曜日が小石川サッカー 100 周年です。

■ 附属蹴球部 100 周年ウィーク

2023年11月23日　桐陰会館

2024 年が附属サッカー 100 周年ということで、いろんなイベントがありました。11 月 23 日には桐陰会館で「日本サッカーのルーツを語ろう Part2 －東京高師附属中学蹴球部の 100 周年を機に」を行いました。その 4 日後に、100 周年記念シニア懇親対抗マッチが駒沢公園でありました。日頃から深く交流している附属、湘南、浦和。それに府立五中、小石川ですね。あるいは自由学園、学習院、中大附属、遠方からは神戸や広島大学附属…。こういったところから OB がわんさか集まり、総勢 70 名がボールを蹴って楽しんだそうです。天気も良くて、みな元気に過ごされました。

そして 2 月の「100 周年ウィーク」です。2023 年 2 月 23 日。桐陰会館で記念式典並びに記念講演が

筑波大学附属高校蹴球部創部100周年記念　シニア懇親対抗マッチ

2023年11月27日　駒沢公園

ありました。多くの方が参加されました。各校 OB の方々も来てくださり、来賓として筑波大学の永田学長、文京区の成澤区長も来られました。JFA の田嶋幸三会長からはお祝いメッセージが動画で紹介されました。

永田学長が来られたのは、記念講演をしてくださった基礎生物学研究所長の阿形清和さんとの関係があるようです。「プラナリアの再生など生物の再生原理の解明にかかる独創的な業績を上げたことが高く評価され」（基礎生物学研究所 HP より）2023 年度の文化功労者に選ばれた阿形さんと永田学長は、サッカーの同志・ライバルです。附属の卒業生は行く先々でサッカーチームを作りますが、研究所でサッカーチームを作った阿形さんは、別の研究所チームを率いる永田学長と何度も試合をされたとのこと。

筑波大学附属高校蹴球部創部100周年　記念式典並びに記念講演

2024年2月23日　桐陰会館

阿形さんの特別講演のあとで、私が 11：40 ～ 12：50 まで 70 分間、話をさせてもらいました。大戦前の話を前半に、後半は私が着任してからの 37 年間の話をするつもりでしたが、前半で半分以上の時間を使い、後半は駆け足になってしまいました。別の日に改めて話をしたいなと思います。

この日の懇親会の様子です。年配の方が多かったけど、若手卒業生も参加し、長らく顧問を務められた伊藤良徳先生も来られ、とても懐かしく、楽しかったですね。これが 2 月 23 日です。

話は少し戻りますが、YC&AC と筑波大学との交流試合は、東京教育大学時代の途中まで続いていましたが筑波大学のころには途切れ、100 周年を機に再開しました。左写真は 100 周年のときの集合写真で、井原正巳さんが来てくれました。その左隣に私がいます。

その後、毎年 2 月にやっていますが、コロナ禍では中止や規模縮小、交歓会はできない状態で、私は行かれませんでしたが、それでも続いていました。そして 120 周年の今年、ようやく制限なしで再開し、私も久しぶりに横浜へ行ってきました。2 月 24 日です。

めちゃくちゃ天気が良く、絶好のサッカー日和でした。現役戦が久しぶりにできました。実は YC&AC のトップチームは編成しにくくなり、現役戦をどうするかは毎年話題になっていました。リーマン・ショックとその後の東日本大震災で外国人の帰国が進み、神戸も含めた外人クラブの経営は大変らしいです。しかもここ数年のコロナ禍です。苦労して久々にトップチームの試合ができるところまで準備をしてくれました。筑波大は一番下のカテゴリーのチームです。彼らにとってはすごくよい経験になっただろうと思います。

OB 戦の写真です。左上が筑波大 OB で右上が YC&AC の OB チーム。右下の細貝さんは YC&AC で理事長もされた方で、左下が私です。

終わってからの懇親会のようすです。左上は中村統太郎さん、右上は息子の中村寿夫さんがスピーチされているところです。那智勝浦町からはるばる来てくださいました。寿夫さんは初参加です。

私は OB 戦で MVP をゲットしました。ペナントを掲げながらの集合写真です。気持ちよかったですね。

（写真は YC&AC および中塚提供）

その翌日です。2 月 25 日もまたまた桐陰会館でした。創部 100 周年パーティーの続きで OB が集まるというので参加しましたが、行ってみると、私の還暦祝いでした。すでに 62 歳になっていますが、コロナ禍で還暦を迎えたこともあり、改めて卒業生が企画してくれたものです。真ん中で赤いちゃんちゃんこを着ているのが私です。

めちゃくちゃ面白かったですね。

「今後に向けて」ということで、コロナ禍の動きを話させていただきました。そろそろ時間なのでこれでおしまいにします。

附属中は 100 周年、五中・小石川も 7 月に 100 周年です。志太中・藤枝東も 100 周年だそうです。湘南は数年前に 100 周年の行事をしました。いろんなところで 100 周年を迎えるタイミングです。

このタイミングで日本サッカー史研究会が復活するのはすごくいいことだなと思います。

それから、学校の教師として部活動に深く関わって

きた者からすると、部活動改革の大きな動きがあるいま、100 年前の部活のことをひもとくのはすごく大事なことだと感じています。

ちゃんと遊んでたんですね、子どもたちが。そして遊びを組織化したのが部活動になったのです。先生に言われたからやるものでなく、やらされるものでももちろんありません。

そのあたりを明らかにしつつ共有できればなと思っています。

■ 参加者からのコメント

中塚：ちょうど 9 時になりましたが、全体を通して何名かからコメントいただけたらと思います。小石川 OB の平沢さん、いかがですか。

平沢：今日も貴重なお話を拝聴させていただき、ありがとうございました。手元に五中・小石川の 80 年史がありまして、それを見ながら今日のお話を伺わせていただいていました。

1924 年に府立五中の蹴球部が創立していますが、さかのぼって 1919 年に、初代校長の伊藤長七先生が着任されています。学校自体はその 1 年前の 1918 年に、五中が籠町に学校を構えたところで、筑波大学附属中・高、高等師範との長い歴史の重さを改めて感じることができました。

80 年史の次に、いま 100 年史を作っています。20 年前に 80 年史が作られたときに、戦績一覧がありまして、最初は 1924 年、第 1 回全国中学校蹴球大会に参加させていただいているんですけども、そこで成城中学と試合をしていますが、会場が高等師範の校庭です。府立五中の最初の試合の会場が高等師範ということが載っておりました。

7 月 13 日に記念試合と式典を準備させていただいています。長い 100 年の歴史を改めてかみしめながら、またご支援をいただきながら開催したいと思いますので、よろしくお願いします。

本日はありがとうございました。

中塚：ありがとうございます。7 月 13 日は参加の方向で調整できそうです。私は参ります。現役部員の予定がよくわからないので高校の試合ができるかどうか、また確認して連絡させていただきます。

お手数かけますけどよろしくお願いします。ありがとうございました。

他の方から、会場の方も含めていかがですか。奥崎さんどうですか。

奥崎：久々に筑波大学附属高校に、何年ぶりかわからないぐらいに来ました。中塚先生から懐かしい話をお聞きしたり新しい発見があったり、八咫烏のデザインの話など、いろいろわかったというか、やっぱり日本サッカー協会が歩んでいる中で、改めて八咫烏の存在に注目してほしいなと思います。

僕はサッカーのメディアで働いていますけど、これからのサッカーを考えるには、これまでどのように歩んできたのかを振り返りつつ理解することがとても大切だということに気づかされ、有意義な時間でした。参加できてよかったです。ありがとうございました。

中塚：ありがとうございます。張さん、小池さんからはどうでしょうか。

張　：いろんな資料を発掘して深掘りしていただいて、興味深く、ああそうなんだと思いながら勉強させてもらいました。

お話聞いてつくづく思ったのは、やっぱり日本のスポーツ、サッカーは学校、そして部活動を中心に展開されてきたんだなということを改めて感じました。最後の方に出てきた横浜や神戸の外人クラブ。それに相当する日本のクラブができなかったのはどうしてなのかということが僕の興味・関心としてまた持ち上がってきました。どうして日本にはクラブができなかったんだろうということを、僕なりに勉強したいなと思いました。ありがとうございました。

小池正通：久しぶりに来ました。僕はもうサッカーから外れた方に行きたいと思っていたのですが、実はど真ん中にいたということを感じました。坪井玄道の（銅像の）隣で勉強していました。

今日話には出てこなかったのですが、小石川 OB の岡野俊一郎さんにはお世話になりました。自分の家業をほっておいても（笑）、本当にサッカー界に貢献された方です。

いま筑波大学蹴球部に関わっているのですが、学生は歴史を知りません。アジアカップに内野航太郎が行っていますが、内野台嶺のことは知ってるのかな（笑）。現役部員はつくばの中で固まってしまっているので、そういう話もしていきたいなと思います。

小石川の 100 周年もあります。僕自身は研究と仕事が忙しいのであまり深く関わることはできませんが、岡野俊一郎さんの後輩として、何かしらサッカー界に貢献できたらなと思っています。

中塚：佐藤さんは音が出なくて発言できないようです。おそらく佐藤さんが言いたいのは、「日本サッカー史研究会が再開します！」ということですよね（チャットで「そうです」と返事あり）。

サロン 2002 でもサッカー史はたびたび取り上げますので、うまくコラボしながらやっていけたらと思います。今後ともよろしくお願いします。

では本日はこれにて終了です。どうもありがとうございました。

以上

（この後は茗荷谷駅周辺で懇親会）

資料・写真等は、出典・提供者が明記されているものを除いて中塚義実所蔵・提供。